

# 博士学位論文

子どもの健全な育ちを保障する  
育児ソーシャル・サポート尺度の開発  
—保育施設を拠点にした孤育て解消の可能性—

平成30年3月

柏 まり

岡山県立大学大学院  
保健福祉学研究科

## 要 旨

本学位論文は、子育て家庭が抱える否定的育児感情を緩和し、子育ての孤立化(以下、孤育て)の解消に向けた支援内容を明らかにするものである。具体的には、保育施設に焦点をあて、子どもの健全な育ちを保障する育児ソーシャル・サポート尺度の開発に関する研究を行ったものである。

男女共同参画社会の実現に向けて女性の社会進出が進む一方で、母親の育児負担、育児不安や孤育て等、否定的な育児感情や閉鎖的な親子関係が、児童虐待や過保護・過干渉といった子どもの育ちに影響している。子どもの健全な育ちを保障するためには、親子や夫婦関係を基盤とした子育て支援のあり方や子育て家庭と社会の繋がりをはかることが課題とされている。

保育施設は、地域の子育て支援拠点である。地域との関わりが希薄化する子育て家庭にとって、保育施設が持つ専門知識や保育技術、地域との繋がりは、子どもが健やかに育ち、安心して子育てするための一助となると考える。

子育て支援に関する測定尺度の研究は、子育ての主体を母親と位置づけ、育児不安や育児感情を測定する尺度開発が主流であり、父親・母親の双方を対象とした子育て支援ニーズに関する測定尺度の検討は十分ではない。そのため、母親の否定的育児感情の程度は測定できても、育児負担を軽減するには至っていないのが実情である。また、母親にとって配偶者の育児支援の有効性や必要性が確認されていても、父親の育児参加に関する実現可能な支援内容についての検討が十分なされていない。

そこで本研究では、第一に、父親・母親の双方を対象とする子育て家庭に特化したソーシャル・サポートを「育児ソーシャル・サポート」と定義し、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度の開発を目的とする。第二に、開発された育児ソーシャル・サポート尺度を用いて、父親・母親の子育て意識と育児ソーシャル・サポートとの関連性について明らかにする。本研究は、子どもの健全な育ちを保障する育児ソーシャル・サポートの実現を目指して、社会と子育て家庭の関係を繋ぐ育児ソーシャル・サポートの可能性について検証するものである。

第1章では、子育て家庭の現状と課題について、関連する研究動向を整理した。具体的には、第一に、ワーク・ライフ・バランスを観点として、未就学の子どもを持つ父親・母親の子育ての実情から、子育ての困難性、母親への育児負担の偏り及び父親の育児参加の困難

性等の課題を顕在化した。第二に、子育て世帯に有用となるソーシャル・サポートを観点として先行研究を概観し、子育て支援に特化した「育児ソーシャル・サポート」について検討した。

第 2 章では、父親・母親の子育て意識と育児ソーシャル・サポートとの関連性から、子育て家庭が求める育児ソーシャル・サポートについて検証した。研究の結果、父親・母親は、配偶者からの精神的サポートと同年代の子どもや親との交流できる居場所があることが、否定的育児感情を緩和させる一因となることが分かった。

第 3 章では、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度を開発し、その因子構造と信頼性を検討することを目的とした。全国の未就学の子どもを持つ父親と母親、1,133 名を対象として質問紙調査を実施した。研究の結果、「保育の専門家による育児ヘルプ」因子、「精神的サポート」因子、「居場所」因子、「短時間の託児」因子、「身近な人による育児ヘルプ」因子の 5 因子、計 22 項目からなる「保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度」が開発された。分析によって得られた各因子について Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、作成された尺度には一定の信頼性が備わっていることが確認された。本研究において作成された保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度は、未就学の乳幼児を有する親の育児支援ニーズを測定するに相応しいものであると考えられる。

第 4 章では、子育て家庭と社会とを繋ぐ保育施設の役割について明らかにした。具体的には、第一に、第 3 章で開発された、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度を用いて、子どもの育ちに影響を与える 3 つの観点に着目し、育児ソーシャル・サポートとの関連について明らかにした。子どもの育ちに影響を与える 3 つの観点は、①育児感情、②親子関係、③夫婦関係である。第二に、保育施設の中でも幼稚園児を持つ父親・母親に着目し、支援ニーズの特徴を把握した。具体的には、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポートは、父親・母親への育児感情を健全化し、親子や夫婦関係といった家族関係を良好に保つための関係性が認められた。

第 5 章では、本研究における一連の研究成果として得られた知見を概観し、保育施設を拠点にした孤育て解消の可能性について考察した。特に、精神的サポートが育児ソーシャル・サポートにおいて最も重要視すべき支援項目として示唆された。今後、保育施設は子育てにおける夫婦関係の大切さを伝えると共に、良好な家族関係の媒介となる支援を模索することが求められる。

# 目 次

第1章 研究の背景	1
第1節 子育て家庭の現状と課題	1
第2節 子育て支援の現状と課題	3
第3節 育児ソーシャル・サポート	5
第4節 本研究の目的	7
第5節 論文構成	9
第2章 育児ソーシャル・サポート尺度を用いた 親の子育て意識に関する調査	11
第1節 第2章の調査概要	11
第1項 第2章の研究目的	11
第2項 第2章の研究手法	11
第2節 第2章の結果	16
第1項 回答者の属性からみた子育て家庭の実情	16
第2項 親の子育て意識と 育児ソーシャル・サポートとの関係性の検討	18
第3節 第2章の考察	22
第1項 子育て家庭の実情から求められる保育施設の役割	22
第2項 保育施設に求められる育児ソーシャル・サポート	22
第3章 育児ソーシャル・サポート尺度の開発	26
第1節 第3章の調査概要	26
第1項 第3章の研究目的	26
第2項 第3章の研究手法	26
第2節 第3章の結果	28
第1項 回答者の属性	28
第2項 尺度分析	28
第3節 第3章の考察	32
第4章 育児ソーシャル・サポートにおける保育施設の可能性	34
第1節 第4章の調査概要	34
第1項 第4章の研究目的	34
第2項 第4章の調査方法	35
第3項 尺度概要	36
第2節 第4章の結果	38
第1項 回答者の属性及び就労状況	38
第2項 相関分析の結果	40
第3節 第4章の考察	48

第5章 研究成果と総合考察 .....	50
第1節 研究成果 .....	50
第2節 総合考察 .....	51
第3節 今後の課題 .....	53
注 .....	54
引用文献 .....	54
参考文献 .....	56
謝辞 .....	59

## 第1章 研究の背景

### 第1節：子育て家庭の現状と課題

少子高齢化を迎えている今日、女性と男性がともに社会に参画し、性別にとらわれることなく、いきいきと充実した人生を送ることができる男女共同参画社会を築くことが重要な課題となっている。平成16年に男女共同参画会議のもとに設置された「少子化と男女共同参画に関する専門調査会」において、仕事と家庭の両立支援や働き方の見直し等が、男女共同参画の推進と少子化対策の両方にとって重要であることが確認され、平成19年にはすべての人を対象にした「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス：以下、WLB）憲章」・「仕事と生活の調和推進のための行動指針」<sup>注1)</sup>が策定された。WLBは「仕事」と「家庭生活」「地域・個人の生活」を年齢や生活状況、個人の希望に応じて調和させることを目指すものであり、平成22年に閣議決定された「子ども・子育てビジョン」に続き、平成27年に創設された「子ども・子育て支援新制度」においてもその実現が必要であるとして、各種政策の中心となっている<sup>1)2)</sup>。

WLBに係る意識は、男女の性別役割観とかがわるものであると想定される。性別役割観は「男は仕事、女は家庭」「男性は主要な業務、女性は補助的業務」に代表される公的及び私的領域における男女の役割分担であり、育児負担の偏りに現れる<sup>3)</sup>。佐藤ら(2014)は、親の育児負担の偏りをはかる指標の一つとしてWLBに着目し、性別役割観がWLBの捉え方に影響を及ぼしていることを明らかにしている<sup>4)</sup>。WLB実現のためには、男性には公的領域における職業達成を期待し、女性には私的領域における母役割・妻役割を期待するという固定的ではなく、実現を推進するに足る柔軟な性別役割観の形成が必要であると指摘している<sup>5)</sup>。

特に少子化の観点から、子育て世代の両立支援に特化するならば、子育て期の女性の社会進出を推進することが重要となる。わが国における子育ては、共働き家庭であっても負担の大部分を母親が担っているという実情がある。総務省が実施した「平成28年社会生活基本調査—生活時間に関する結果—」<sup>6)</sup>では、男性の家事関連時間は44分で、平成23年度調査と比べると2分増加した。女

性の家事関連時間は3時間28分で、平成23年度調査と比べると7分減少しているものの、男女の差は2時間44分と依然として大きい。また、内閣府は少子化対策として、6歳未満児をもつ夫婦の家事・育児時間に関する国際比較結果を公表している。具体的には、6歳未満の子どもをもつ夫の家事関連時間は1日当たり67分となっており、先進国中最低の水準であることが明らかとなっている<sup>7)</sup>。結果の詳細は表1-1、図1-1のとおりである。

表1-1：男女別家事関連時間の推移（平成8年～28年）一週間全体<sup>8)</sup>

	男	女	男女差
平成8年	0.24	3.34	-3.10
平成13年	0.31	3.34	-3.03
平成18年	0.38	3.35	-2.97
平成23年	0.42	3.35	-2.93
平成28年	0.44	3.28	-2.84

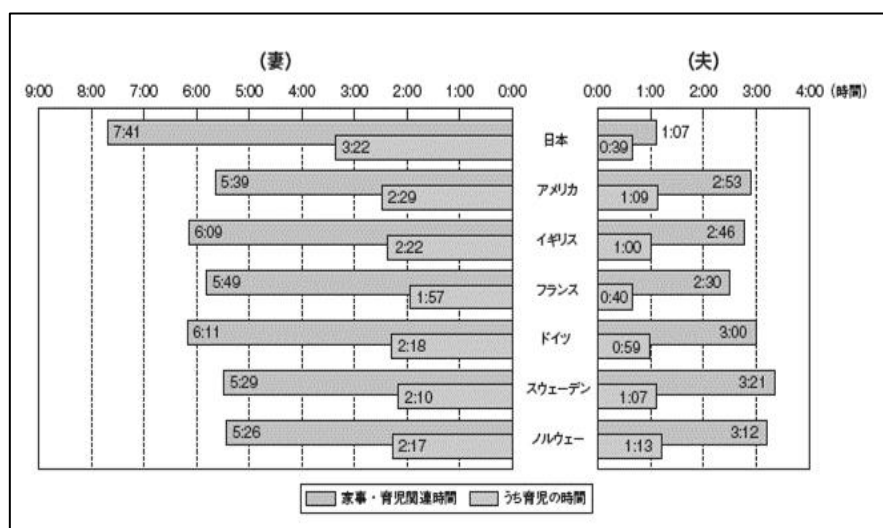


図1-1：6歳未満児をもつ夫婦の家事・育児時間に関する国際比較結果<sup>9)</sup>

このように、父親の育児参加については、仕事の忙しさ等を理由に、育児をしたくてもできない男性も多く、父親の意識も育児の手伝いとどまり、育児の主体と責任は未だ母親が主に担っているとの指摘もある<sup>10)</sup>。女性は、家事・育児に加えて労働力としても期待され、社会進出を余儀なくされる一方で父親の育児参加の進捗状況は十分とはいえない。家庭内での夫婦の子育てに係るバランスが取れていないことが母親を社会から孤立させ、母親の育児負担や育児不安を誘発する。母親の否定的な育児感情や閉鎖的な親子関係が児童虐待や過保護・過干渉といった子どもの育ちに影響するものと考えられる。

日本の子育ては、子どもの育て方に関心が向けられる傾向がある。子どもの育ちには、子どもを育てる側の親自身が成長・発達することの重要性が、十分に認識されているとはいえないとの指摘もある<sup>11)</sup>。子どもが自ら育つ力を尊重し、子どもの健全な育ちを保障する子育て支援を実現するためには、子どもが健全に育つ条件となる親子や夫婦関係を基盤とした家族と社会のつながりに着目した子育て家庭への支援のあり方を希求することが課題となる。具体的には、WLBの実現を観点に「男は仕事、女は家庭も仕事も」といった性別役割観を是正し、父親・母親が共に子育ての主体となって子育てにかかわることが求められる。特に、母親が抱える育児負担や否定的な育児感情を緩和すること、子どもへの感情や子どもへの適切なかかわり方等の親子関係を健全化すること及び夫婦間の満足度やパートナーシップ等の夫婦関係を安定させることを視点とする社会的支援の確立が求められている。

## 第2節：子育て支援の現状と課題

近年の都市化、核家族化等の影響により血縁・地縁型の子育て支援のネットワークは弱体化し、子育て家庭を取り巻く社会は厳しく、家庭の養育力の低下が懸念されている。特に、転勤や住環境の為、祖父母と同居・近居ができない家庭も増え、心を許せる近親者や親しい友人からの支援が得にくい家庭もある。

子育ての大部分を担う母親が、希薄化する地域コミュニティから得られる支援には、限界がある。女性の就労が一般化する一方で、子育てと就労の両立は難しく、子育て不安や子ども虐待に代表される子育ての孤立化も社会問題として顕在化することとなった<sup>12)</sup>。家族や親族の協力も得られず、近所との付き合いも希薄な状態で子どもを育てている子育ての孤立化（以下、孤育て）の状態が、少子化、児童虐待、過保護・過干渉といった子どもの育ちに関する問題の要因として指摘されている。乳幼児期の子どもをもつ家庭への支援として、祖父母や子育て仲間等の血縁・地縁型の子育てネットワークを補完する、社会的子育て支援システムの整備が求められている<sup>13)</sup>。



子育て支援とは、親が安心して子どもを産み育て、子どもの健全な育ちを支える社会的支援である。子育ての主体者は、子どもを養育する親であり、子育て支援は、子どもが自ら育つ力を尊重し、子どもの育ちを支援する営みである。柏女(2003)は、子育て支援について「親及び家庭における児童養育の機能に対し、家庭以外の私的、公的、社会的機能が支援的に関わること」<sup>14)</sup>と定義している。また、大豆生田ら(2014)は、子育ては「社会の支えがあってはじめて親や家族が子育ての第一義的責任を果たせる」<sup>15)</sup>と述べている。子育て支援の基本となる3つの視点として、親や家族を支えるための支援、子どもの健全な育ちを支える支援及び支え合いを形成する社会的・制度的支援を挙げている<sup>16)</sup>。すなわち子育て支援は、親、家族、子どもの育ち及び子育て社会を総合的に支援する取り組みである。

子どもの成長発達に応じて変化する子育て家庭への支援ニーズを補完する支援施設として、保育施設の利用が考えられている。具体的には、「保育施設に在籍する子どもとその保護者に対する支援」、「在宅で子育てをする地域の親に対する支援」が保育施設の役割として位置づけられている<sup>17)</sup>。在籍する親への支援内容としては、子育てに関する悩み等の相談、就労と子育てを両立させるために利用できる保育の提供、子育ての学習機会の提供及び子育てに関する情報提供が挙げられる。在宅で利用する親への支援内容としては、子育てに関する悩み等の相談、子育ての学習機会の提供、子育てに関する情報の提供に加え、子育てコミュニティを育てる育児サークル等の活動支援及び一時的、緊急に必要な場合に利用できる保育の提供が挙げられる。地域の子育て支援における保育者の役割としては、「子育ち」の視点、「親育ち」の視点、「親子関係」の視点及び「子育て環境」の視点が期待されている<sup>18)</sup>。しかし、父親・母親が必要としている子育て支援ニーズの乖離を解消し、子育て家庭への支援ニーズを補完する保育施設の役割に着目した研究は十分とはいえない。

地域とのかかわりが希薄化し、父親・母親の努力だけでは健全に子育てを遂行することが難しい現代において、子育て家庭が支援を必要とするときに、必要な支援を得ることができる社会的支援として、保育施設は子育て公助の役割

を担っている。保育施設は、在園している子どもの健全な成長発達を支える場であると共に、在園児や利用する親の子育て自助に寄り添う親育ての役割も有している。特に、保育者は子どもの育ちにとって親自身の成長・発達の重要性を伝え、親と共に子育ての難しさや楽しさを共有することを大切にしながら、親の親性や養育性の発達を支援する役割が期待されている。

また、保育施設には、近隣の子どもと親が集い、安心安全に過ごせる場でもあることから、地域の子育て家庭を繋ぐ子育て共助・互助への支援機能も併せもっている。地域や子育て仲間とのかかわりが希薄化する子育て家庭にとって、保育施設がもつ専門知識や保育技術、地域や子育て家庭との繋がり、乳幼児期の子育て家庭に開かれた子育て支援拠点としての重要な役割を担っている。子どもが健やかに育ち、親が安心して子どもを育てられる社会を実現するためには、保育施設がもつ子育て自助・共助・互助・公助の重層構造による支援が必要となる。保育施設を拠点にして子育て家庭と地域が繋がることで、孤育てを解消し、子どもが健やかに育ちや安心して子育てできる地域コミュニティづくりの一助となるのではないだろうか。

### 第3節：育児ソーシャル・サポート

家庭に対する社会的支援を捉える概念として、ソーシャル・サポートがある。House (1981) は、ソーシャル・サポートの概念を4つに分類し、emotional(情緒的)、instrumental(手段的)、informational(情動的)、appraisal(評価的)から成り立つ概念であるとしている<sup>19)</sup>。また、久田(1987)は、ソーシャル・サポートについて「ある人を取り巻く重要な他者(家族、友人、同僚、専門家等)から得られるさまざまな形の援助(support)はその人の健康維持に重大な役割を果たす営み」と定義している<sup>20)</sup>。対象者を取り巻く情緒的、手段的、情動的、評価的な支援が個人の健康維も等に有用なのである。母親の子育てとソーシャル・サポートの関係性に関する先行研究において、柏木・若松(1994)は、父親の育児・家事参加度の高さが母親の否定的感情の軽減につながることを指摘している<sup>21)</sup>。津田・菊池(2000)は、乳幼児期の子どももつ有職女性の生活満足感に

は、夫のサポートと夫以外に自分の話を聞いてくれる人の多さとの関連性を示唆している<sup>22)</sup>。荒木ら(2001)は母親のストレスを軽減する役割として、父親や身近な近親者に代わる保育者からの育児ソーシャル・サポートの可能性について触れている<sup>23)</sup>。渡邊・石井(2010)は、母親の育児ストレスは、父親や身近な人から支援を受け、子育てへの積極性が高まることで軽減されると示している<sup>24)</sup>。また、牧野(1982)は、父親が子育てに責任感をもっていないと感じる母親は、孤独感や圧迫感をもつことを示唆し、情緒的に不安定な状態での子育てをおこなうことになることを指摘している<sup>25)</sup>。このように、母親を子育ての主体者と位置づけた研究では、母親の生活満足度や否定的育児感情の緩和要因として、父親や近親者もしくは、それに代わる身近な他者からのサポートの有効性が確認されている。

育児ソーシャル・サポートは、乳幼児期の子育てに特化した社会的支援である。育児ソーシャル・サポート研究において、手島・原口(2003)は、母親の育児不安や育児ストレスの緩和要因として、育児ソーシャル・サポートの効果について言及している<sup>26)</sup>。手島・原口(2003)、原口・手島(2006)は、3つの下位因子によって構成された育児ソーシャル・サポート尺度を開発している<sup>27)28)</sup>。下位因子は、精神的サポート、育児ヘルプ及び居場所づくりである。寺見ら(2008)は、母親の育児経験とソーシャル・サポートの関連に関する調査において、4つの下位因子から構成された育児サポート尺度開発を通して、父親や身近な他者からの育児サポートの有用性を示唆している<sup>29)</sup>。下位因子は、夫の理解、近所の人、親・きょうだい及び地域の機関である。

このように、母親の子育て支援において、父親や身近な近親者からのサポートの有用性が確認されている。親子が安心して集い、子育てについて気軽に相談できる居場所や専門機関があることが精神的な支えとなり、現状の子育ての課題は一定程度解消する可能性があると考えられる。しかし、子育て家庭の現状では、血縁・地縁型の子育て支援のネットワークは崩壊の一途をたどり、父親や祖父母、地域社会から支援を得られる家庭は限られている。

子育て支援及び育児ソーシャル・サポートに関する先行研究を概観すると、

育児ソーシャル・サポートを安定的に提供できる地域の子育て支援拠点として、保育施設がもつ子育て自助・共助・互助・公助を基盤とした重層構造による子育て支援が求められている。育児ソーシャル・サポートに関する研究は進められているものの、保育施設に着目した育児ソーシャル・サポートの内容や有用性については、十分に検討されているとはいえない。保育施設を拠点にした孤育て解消に向けた試みとして、子どもの健全な育ちを保障する育児ソーシャル・サポートの可能性について検討が必要である。

#### 第4節：本研究の目的

女性の就労が一般化され、仕事の有無にかかわらず、母親が子育てに係る負担の大部分を担っている。希薄化する地域コミュニティの中で、孤立する家庭も少なくない。こうした育児負担の偏りや孤育てが、母親の育児不安や育児ストレスを増大させ、児童虐待や過保護・過干渉といった子どもの育ちに影響を及ぼしている。孤育てを解消し、子どもの健やかな育ちを保障するためには、子育て家庭を支える社会的支援を提供することが、喫緊の課題となる。特に、親子や夫婦関係を基盤とした子育て支援のあり方や子育て家庭と社会の繋がりをはかることが、孤育て解消に有用と考える。

地域における子育て支援拠点として、保育施設の子育て支援機能の拡充が求められている。地域の保育施設が子育て家庭にとっての身近な子育て支援の場となる必要がある。保育者とのかかわりや他の親子との交流を通して、親自身の成長・発達を支援することが、子育て家庭がもつ子育て自助への支援に繋がるものと考えられる。また、保育施設が、子育て家庭の居場所となり、子育て仲間との交流の場や子育てサークル等の支援をおこなうことが、子育て共助・互助への支援として有効な手立てとなる。地域とのかかわりが希薄化する子育て家庭にとって、保育施設がもつ専門知識や保育技術及び地域との繋がりは、子どもが健やかに育ち安心して子育てするための一助となる。

ソーシャル・サポートは、母親の育児不安や育児負担等、母親の否定的育児

感情の緩和要因として有用であることは、先行研究からも明らかである。特に、母親にとって配偶者からの心理的支援の有用性や必要性が確認されている。しかし、具体的な支援機関や支援内容が不明瞭なため、母親の育児負担を軽減するための具体的な支援内容を検討するには至っていない。本研究において、保育施設を子育ての支援拠点と位置づけることで、社会的支援施設として具体的な支援内容の把握が可能になると考える。

本来、子育ては父親も母親と同等の責任がある。現在進められている父親の育児参画に関する政策によって、父親の子育て意識も高まるものと推察する。父親・母親の双方を子育ての主体と位置づけるとともに、父親・母親が求める支援の特徴を明らかにすることで、親子関係や夫婦関係を基盤とした保育施設における子育て支援のめざす視座が得られるものと考ええる。

本研究は、子育て家庭が抱える否定的育児感情を緩和し、孤育て解消に向けた支援内容を明らかにするものである。特に、子育て家庭に特化したソーシャル・サポートを「育児ソーシャル・サポート」と定義し、保育施設に焦点をあて、子どもの健全な育ちを保障する育児ソーシャル・サポート尺度開発を通して、保育施設を拠点にした孤育て解消の可能性について検討をおこなう。

具体的には、第一に、子育て家庭の現状と課題について関連する研究動向を整理する。WLBを観点として、乳幼児期の子どもをもつ家庭の子育ての実情について検討し、子育ての課題を顕在化するとともに育児ソーシャル・サポートの重要性について考察する。第二に、子育て家庭が抱える育児負担や育児不安等を緩和し、子育て家庭に対する支援の拡充を図るために、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度の開発を試みる。第三に、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度を用いて、父親・母親が求める支援の特徴を明らかにするとともに、子どもの健全な育ちを保障するために有用となる保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポートの可能性について検討する。

本研究の新規性は、子育て家庭に内在する支援ニーズを父親・母親の双方を

観点として顕在化し、子育て自助・共助・互助・公助の重層構造による支援の実現をめざして、保育施設が補完すべき支援内容について検討する点にある。

これまでの子育て支援に関する研究は、子育ての主体を母親と位置づけ、母親の子育て支援ニーズを測定する尺度開発が主流であり、父親・母親の双方を対象とした子育て支援ニーズを測定する尺度は十分検討されているとはいえない。そのため、母親の孤育ての問題や子育てに係る支援の必要性が確認されていても、孤育てを解消するための具体的な支援内容についての検討は、必ずしも十分とはいえない。また、母親の孤育て解消には、配偶者である父親からの支援の必要性が確認されていても父親の育児参加は難しく、子育て家庭が求める支援と実際に得られている支援には乖離がある。父親・母親の子育てに係る問題を補完する支援施設として保育施設の活用について検討することで、子育て自助・共助・互助・公助の重層構造による支援が可能になると考える。

このことから、子育ての支援拠点としての活用が期待される保育施設に着目し、父親・母親の双方を対象とした子育て支援ニーズの測定尺度を開発することで、父親・母親の子育て支援ニーズを顕在化することが可能となり、子育て家庭が求める支援と得られる支援との乖離の解消に寄与するものと考えられる。

## 第5節：論文構成

本研究は、5つの章によって構成されている。第1章では、子育て家庭の現状と課題について、関連する研究動向を整理している。第2章では、父親・母親の子育て意識と育児ソーシャル・サポートとの関連性から、子育て家庭が求める育児ソーシャル・サポートについて検証する。第3章では、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度を開発し、その因子構造と信頼性について検討する。第4章では、前章で開発された保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度を用いて、子どもの育ちに影響を与える3つの観点に着

目し，育児ソーシャル・サポートとの関連について検討する。子どもの育ちに影響を与える3つの観点は，①育児感情，②親子関係及び③夫婦関係である。第5章では，本研究における一連の研究成果として得られた知見を概観し，保育施設を拠点にした孤育て解消の可能性について考察する。

## 第2章：育児ソーシャル・サポート尺度を用いた親の子育て意識に関する調査

### 第1節：第2章の調査概要

#### 第1項：第2章の研究目的

第2章の研究目的は、子育て家庭が求める支援ニーズに応じた子育て支援をおこなうために、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポートの可能性について検討することである。第一に、全国の乳幼児期の子どもをもつ父親・母親を対象とした質問紙調査を実施し、子育て家庭の実情を把握する。第二に、親の子育てに関する意識と親の育児ソーシャル・サポートに関する意識との関連性から、子育て家庭が求める育児ソーシャル・サポートを把握する。研究を通して、子育て家庭における子育て機能を補完する保育施設の役割について考察し、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポートの可能性について検討する。

#### 第2項：第2章の研究方法

##### 1. 調査概要

本研究は、無記名自記入による質問紙調査を実施した。調査方法は、研究対象者にアンケート案内メールを配信し、URLアクセス法<sup>注2)</sup>により回答を求める。調査期間は、2015年9月にアンケートを配信し、10月上旬を回収期限とする。

倫理的配慮として、アンケートでは氏名、住所等個人情報の収集をおこなわず統計的手法によりデータ集計をおこない、個人等が特定されないことがないようにする。アンケート案内メールに記載されたURLアクセス法を採用し、回答は自由意思（任意）とする。本調査については、平成27年度岡山県立大学倫理委員会の承認を得て実施する。

##### 2. 調査項目と相関分析

本研究の調査項目と分析尺度は、次のとおりである。

- (1) 回答者の属性について
- (2) 親の育児不安を探る「育児不安尺度」



(3) 親の育児感情を探る「育児感情尺度」

(4) 親の育児ソーシャル・サポートに関する意識を探る「育児ソーシャル・サポート尺度」

上記の調査項目から得られた回答者の属性を概観し、子育て家庭の実情について把握する。また、育児ソーシャル・サポート尺度を用いて、親の子育て不安や否定的育児感情を緩和する規定要因を明らかにする。

本研究でおこなう相関分析項目は、次のとおりである。

(1) 「育児不安尺度」と「育児ソーシャル・サポート尺度」との相関分析

(2) 「育児感情尺度」と「育児ソーシャル・サポート尺度」との相関分析

上記に示した相関分析から得られた関係性の諸相から、子育て家庭に必要な育児ソーシャル・サポートを検討する。

### 3. 尺度概要

本研究で用いる尺度の概要は、下記の(1)～(3)のとおりである。

(1) 親の育児不安を探る「育児不安尺度」

親の育児不安を探る尺度として、手島・原口(2003)<sup>30)</sup>が開発した「育児不安尺度」を用いる。「育児不安尺度」の下位因子は、第1因子「中核的育児不安」、第2因子「育児感情」、第3因子「育児時間」によって構成されている。下位因子について $\alpha$ 係数を算出した結果、いずれも高い信頼性が認められている。

親の育児不安の測定に用いる因子項目は、次のとおりである。

① 中核的育児不安：育児に対する不安に関する項目

② 育児感情：育児に対する感情に関する項目

③ 育児時間：育児に係る時間に関する項目

本研究では、信頼性が認められる親の育児不安要因の22項目について、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までを程度に従い4件法を用いて評定する。具体的な質問項目については、表2-1のとおりである。

表 2-1：育児不安尺度項目の概要

下位尺度	概要	本調査で用いた質問項目
中核的育児不安	子どもや育児に対する感情に関する項目	1. 育児についていろいろな心配なことがある 2. 親としての能力に自信がない* 3. 子どもの発育・発達が気にかかる 4. 何となく育児に自信がもてない 5. 子育てに失敗するのではないかと思うことがある 6. この先どう育てたらいいのかわからない 7. よその子どもと比べて、落ち込んだり、自信をなくしたりすることがある 8. どうしついたらよいか分からない
育児感情	子育てに対する不安に関する項目	9. 子どもを虐待しているのではないかと思うことがある 10. 子どもと一緒にいるとき、心がなごむ 11. 子どもといっしょにいると楽しい 12. 子どもを育てることが負担に感じる 13. 子どもをわずらわしいと思うことがある 14. 子どもを生まなければ(もたなければ)よかったと思う 15. 育児意欲がない 16. 子どもを憎らしいと思うことがある
育児時間	時間に関する項目	17. 自分の時間がない 18. 1人になれる時間がない 19. 自分のペースが乱れる 20. 子どものために仕事や趣味を制約される 21. 毎日同じことの繰り返しをしている 22. 家事をする時間がない

※下線部については、男性回答者に対応できるよう一部修正した

## (2) 親の育児感情を探る「育児感情尺度」

親の育児感情を探る尺度として、荒牧(2008)<sup>31)</sup>が開発した「育児感情尺度」を用いる。「育児感情尺度」は、第一因子「育児への負担感」、第二因子「育児への不安感」、第三因子「育児への肯定感」によって構成されている。下位因子尺度の $\alpha$ 係数を算出した結果、いずれもおおむね十分に高く、信頼性が確認されている。親の育児感情の測定に用いる因子項目の概要は、次のとおりである。

①育児への負担感：育児への束縛による負担感の項目／子どもへの態度・行為への負担感の項目

②育児への不安感：育て方への不安感／育ちへの不安感の項目

③育児への肯定感：育児への肯定感の項目

本研究では、信頼性が認められる親の育児感情の21項目について、「よくある」から「まったくない」までを程度に従い4件法を用いて評定する。具体的な質問項目は、表 2-2 のとおりである。

表 2-2 : 育児感情尺度項目の概要

下位尺度	概要	本調査で用いた質問項目
育児への負担感	育児への束縛による負担感	1. 毎日、育児の繰り返しばかりで、社会とのきずなが切れてしまうように感じる 2. 自分一人で子育てしているような気がする 3. 子どもに時間を取られて、自分のやりたいことができず、イライラする 4. 子どもを育てるために我慢ばかりしている
	子どもの態度・行為への負担感	5. 子どもが汚したり散らかしたりするのでイヤになる 6. 自分の子どもでもかわいくないと感じることもある 7. 子どもが自分のいうことを聞かないのでイライラする 8. 子どもがわずらわしくてイライラする 9. 子どものことを考えるのが面倒になる
育児への不安感	育て方への不安感	10. 育児のことでどうしたらよいかわからなくなる 11. 子どもをうまく育てているか不安になる 12. 自分の育て方でよいのかどうか不安になる 13. 子どもにうまく対応できていないと感じることがある
	育ちへの不安感	14. 入園後、自分の子どもが他の子どもに遅れないでついていけるか不安になる 15. 他の子どもにはできて、自分の子どもにはできないことが多い 16. 同年齢の子どもと比べて、自分の子どもは幼いと感じる 17. 他の子どもと比べて、自分の子どもの発達が遅れているのではないかと思う
育児への肯定感	肯定感	18. 子どもを育てるのは楽しいと思う 19. 子どもを育てることは、有意義で素晴らしいことだと思う 20. 子どもの成長が楽しみだと感じる 21. 子どもを育てることによって、自分も成長しているのだと感じる

(3) 親の育児ソーシャル・サポートに関する意識を探る「育児ソーシャル・サポート尺度」

親の育児ソーシャル・サポートに関する意識を探る尺度として、手島・原口(2003)<sup>32)</sup>、原口・手島(2006)<sup>33)</sup>が開発した「育児ソーシャル・サポート尺度」を用いる。「育児ソーシャル・サポート尺度」は、第一因子「精神的サポート」、第二因子「育児ヘルプ」、第三因子「居場所づくり」によって構成されている。下位因子について $\alpha$ 係数を算出した結果、高い信頼性が認められている。親の子育て環境の測定に用いる因子項目の概要は、次の①～③のとおりである。

①精神的サポート：養育者のサポートの源となり、夫婦で子どもの様子について話し合える関係や心配事を相談できる関係があること等、自分の育児における精神安定に関する項目

②育児ヘルプ：専門家によるサポートとして育児相談できる場や育児に関する情報提供に関する項目等、育児代替えの共助的サポートに関する項目

③居場所づくり：子どもが安心して遊ぶことのできる場所や親が安心して

子育てについて話し合える人や場所があること等、家庭以外の居場所づくりに関する項目

本研究では、子育て家庭における身近な社会的支援拠点として、保育施設における育児ソーシャル・サポートの可能性について検討することを目的としていることから、保育施設及び保育者に関する項目を追加して調査を試みた。追加項目は先行研究を手がかりとして、共同研究者1名、子育て支援拠点スタッフ3名からの助言を得て、筆者が共同研究者1名と共に選定した。本調査では、因子ごとに $\alpha$ 係数を算出し信頼性が確認された7項目を質問紙に採用した。

親の子育て環境として想定される24項目について、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までを程度に従い、4件法を用いて評定する。具体的な質問項目については、表2-3のとおりである。

表2-3：育児ソーシャル・サポート尺度の項目概要

下位尺度	概要	本調査で用いた質問項目
精神的サポート	配偶者の育児における精神的安定に関する項目	1. その日の子どもの様子を夫婦で話し合うことができる 2. 子どもの心配事があるときに配偶者に相談できる* 3. 配偶者はあなたをよく理解してくれている* 4. 配偶者はあなたの代わりに育児や家事ができる* 5. 私一人で子どもを育てている
育児ヘルプ	専門家による育児サポート育児代替の共助的サポートに関する項目	6. 子どもの心配事があるときに相談できる人がいる 7. 子育てをする中で感じたことを安心して話すことができる人がいる 8. 歯医者や美容院等に行きたいとき、預かってくれる人がいる 9. 短時間でも預かってくれる人が近くにいる 10. 母乳育児や離乳食等、子育てについて話し合える人が身近にいる 11. 育児の仕方を相談できる人（医師・保健婦・保育士等の専門家）がいる 12. <u>子育てに困ったときには気軽に相談できる保育の専門家（保育者）が身近にいる</u> 13. <u>子どもの成長を気にかけてくれる保育の専門家（保育者）が身近にいる</u> 14. <u>子どもの心配事があるときにすぐ相談できる保育施設がある</u> 15. <u>子どもを安心して遊ばせられる保育施設が身近にある</u> 16. <u>子どもと歩いて遊びに行ける保育施設が身近にある</u> 17. <u>子育てについて専門的な知識を得る機会がある</u> 18. <u>短時間でも預かってくれる保育施設が身近にある</u>
居場所づくり	家庭以外での居場所づくりに関する項目	19. 同じ年くらいの子とも遊ばせる機会がない 20. 同じ年くらいの子ともをもつ親と話す機会がない* 21. 子育てのことを継続的に話せる機会がない 22. 同世代の子ともをもつ家族との付き合いがない 23. 子どもを預けたり預かったりする子育ての仲間が身近にいる 24. 移動の手段が乏しく車がないと外出しにくい

※下線部については、男性回答者に対応できるよう一部修正した  
※二重下線部は本調査で新たに追加した質問項目である

#### 4. 分析方法

分析方法は、第一に、回答の性別、年齢、世帯構成、子どもの数に加えて、就労状況等について単純集計をおこない回答者の属性について概観する。第二に、先行研究に基づき親の子育て感情を把握する測定する2つの尺度（育児不安尺度、育児感情尺度）と、親の育児ソーシャル・サポートに関する意識を測定する育児ソーシャル・サポート尺度を用いて相関分析をおこない、子育て家庭に内在する育児ソーシャル・サポートの課題を顕在化する。その際、相関係数.200を超える値の場合に意味ある相関とみなすこととする。

#### 第2節：第2章の結果

##### 第1項：回答者の属性からみた子育て家庭の実情

回答数は、1,133名であり、回答者全員が乳幼児期の子どもをもつ子育て中の親である。調査対象の親の性別、年齢、世帯構成、子どもの数に関する結果の詳細は、表2-4～表2-7のとおりである。

表2-4：性別(%)

男性	女性
51.7	48.3

表2-5：年齢 (%)

10代	20～ 24歳	25～ 29歳	30～ 34歳	35～ 39歳	40～ 44歳	45～ 49歳	50～ 59歳	60代 以上
0.2	2.1	24.4	10.8	16.2	25.1	7.0	13.5	0.9

表2-6：世帯構成 (%)

夫婦と 子ども	ひとり親と 子ども	子どもと 親とその親	その他
83.4	3.3	12.1	1.2

表2-7：子どもの数 (%)

1人	2人	3人	4人	無回答
46.7	40.2	10.4	2.6	0.1

具体的には、性別に大きな偏りはなかった。年齢では、10代と60代以上の回答者がやや少ないが、全ての年齢層から回答を得ることができた。世帯構成では、「夫婦と子ども」が83.4%と最も高く、核家族世帯が一般化した子育て家庭の実情が認められた。また、子どもの数では、「1人」が46.7%、次いで

「2人」が40.2%となり、少子家庭の実情が把握された。本研究の回答者は、年齢、性別に加え世帯構成等も偏りなくわが国の状況を反映しており、乳幼児をもつ子育て家庭の実情を把握し、課題について顕在化することが可能である。

親の就労状況について「就労形態」と「職場からの帰宅時間」から子育て家庭の実情を把握した。結果の詳細は、図2-1、図2-2のとおりである。

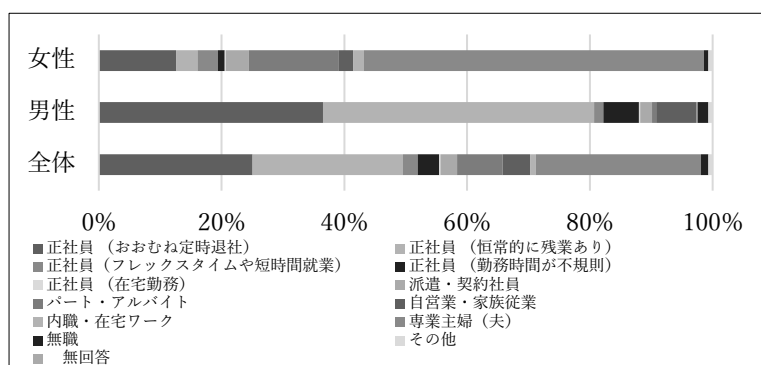


図 2-1：就労状況（性別）

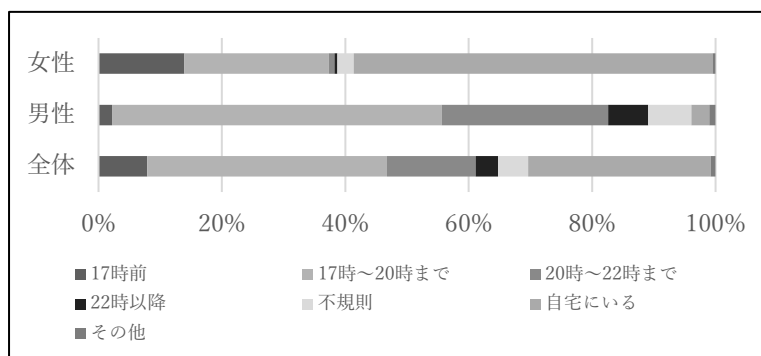


図 2-2：帰宅時間（性別）

男女別にみた親の就労形態では、「正社員（全項目を含む）」は、男性89.1%、女性20.7%、「専業主婦（夫）」は、男性0.3%、女性55.4%であった。男性の89.1%を占める「正社員」の内訳は、「恒常的に残業あり」44.2%、「定時帰宅」36.5%、「勤務時間が不規則」5.8%、「フレックスタイムや短時間就業」2.4%、「在宅勤務」0.2%となった。

男女別にみた職場からの帰宅時間は、「17時前」が男性2.2%、女性13.9%、「17時～20時まで」が男性53.4%、女性23.4%、「20時～22時まで」が男性27.0%、女性0.9%、「22時以降」が男性6.5%、女性0.5%、「不規則」が男性7.0%、女性0.5%であった。

女性 2.6%, 「自宅にいる」が男性 2.9%, 女性 58.1%, 「その他」が男性 1.0%, 女性 0.5%と続いた。

特に、男性の就労の実情として恒常的な残業や 20 時以降に帰宅する厳しい職務実態の一部を把握することができた。また、女性は有職者であっても 20 時までには帰宅しており、家庭と仕事を両立する女性の姿が明らかとなった。

## 第 2 項：親の子育て意識と育児ソーシャル・サポートとの関係性の検討

親の子育て感情に関する「育児不安尺度」、 「育児感情尺度」の 2 尺度と、親の子育て環境を測定する「育児ソーシャル・サポート尺度」との相関分析をおこなった。分析結果の詳細については、表 2-8 のとおりである。

尚、低い相関（相関係数 0.2 以上, 0.4 未満）については網掛け 1■を付記する。中程度の相関（相関係数 0.4 以上, 0.7 未満）については網掛け 2■を付記する。高い相関（相関係数 0.7 以上）については網掛け 3■を付記する。

### 1. 育児不安

「育児不安尺度」と「育児ソーシャル・サポート尺度」との相関分析をおこなった。分析の結果、育児不安尺度の下位因子「中核的育児不安(-.205\*\*）」と育児ソーシャル・サポート尺度の下位因子「精神的サポート」には、負の相関がみられた。育児不安尺度の 3 つの下位因子と育児ソーシャル・サポート尺度の下位因子「育児ヘルプ」には、相関がみられなかった。育児不安尺度の下位因子「中核的育児不安(.325\*\*）」、「育児感情(.260\*\*）」、「育児時間(.317\*\*）」の 3 因子と育児ソーシャル・サポート尺度の下位因子「居場所づくり」には、正の相関がみられた。

男女別にみた相関分析結果の詳細は、次の(1)～(3)のとおりである。

#### (1) 「育児不安尺度」×「精神的サポート」

男性には「育児不安尺度」の 3 因子において、育児ソーシャル・サポート尺度の下位因子「精神的サポート」との相関は認められなかった。女性では、「中核的育児不安」因子と「精神的サポート」因子に負の相関(-.271\*\*)が認められた。具体的には、女性は精神的サポートに関連した配偶者からの支援が得られてい

ると感じるほど育児不安が軽減する結果となった。つまり、女性の育児不安を緩和するためには、配偶者が女性の言葉や思いに耳を傾け、共に育児や家事を担えることが、結果として精神的な支えとなり、育児不安の緩和に繋がっていると考えられる。

## (2) 「育児不安尺度」×「育児ヘルプ」

男性には「育児感情(否定)」因子と「育児ヘルプ」因子に正の相関(.276\*\*)が認められたが、女性では「育児不安尺度」の3因子において相関が認められなかった。具体的には、育児の専門家や育児代替による育児ヘルプは、男性の否定的な育児感情を高めることが把握された。ここから、慣れない場所や他者、関係性が希薄な専門家からの育児ヘルプは、男性の育児に対する不安感や負担感を高め、結果的に育児意欲を低減させる恐れがあることが推察される。

## (3) 「育児不安」×「居場所づくり」

性別に関係なく「中核的育児不安」因子(男性:.376\*\*, 女性:.305\*\*), 「育児感情(否定)因子(男性:.287\*\*, 女性:.222\*\*), 「育児時間」因子(男性:.365\*\*, 女性:.313\*\*), 3因子は、「居場所づくり」因子と正の相関が認められた。具体的には、居場所が十分に得られていないと感じる親ほど育児不安や否定的な育児感情も高くなった。また、「居場所づくり」は「育児時間」に関する不安項目と関連していることから、安心して子どもと過ごせる場や子育て仲間との交流の場や機会をもつことで子育てにゆとりを感じるができる。また、育児時間やゆとりの確保が育児不安を低減させる支援の一つと考えられる。

## 2. 育児感情

「育児感情」と「育児ソーシャル・サポート」との相関分析をおこなった。分析の結果、育児感情項目の「育児への負担感(-.238\*\*)」と育児ソーシャル・サポート項目の「精神的サポート」には負の相関があった。育児感情項目の「育児への負担感(.252\*\*)」「育児への不安感(.280\*\*)」と育児ソーシャル・サポート項目の「居場所づくり」には、正の相関がみられた。育児感情項目の「育児への肯定感(.420\*\*)」と育児ソーシャル・サポート項目の「精神的サポート」につ



いては、強い正の相関がみられた。

男女別にみた相関分析結果の詳細は、次の(1)～(3)のとおりである。

(1)精神的サポートは、女性の育児感情項目の「育児への負担感」と負の相関(-.232\*\*)があった。男性は、育児感情項目「育児への肯定感」と強い正の相関(.538\*\*)が認められた。女性の「育児への肯定感」においても正の相関(.383\*\*)が認められた。具体的には、配偶者からの支援は、性別に関係なく肯定的育児感情を高める効果があり、特に男性においてはその傾向が顕著に認められた。

(2)育児ヘルプは、女性の育児感情項目の「育児への肯定感」と正の相関(.219\*\*)がみられた。男性については、育児感情項目と育児ヘルプとの相関は認められなかった。具体的には、保育の専門家によるサポートや短時間の託児に関するサポートが得られていると感じている女性ほど、育児肯定感が高いことが把握された。つまり、保育施設の利用経験や親しい友人の存在があると推測される母親には効果があるが、保育施設や地域との関係性が希薄になりやすい男性にとっては、逆効果となることがわかった。

(3)居場所づくりは、性別に関係なく育児感情項目の「育児への負担感(男性:.343\*\*, 女性:.234\*\*)」と、「育児への不安感(男性:.330\*\*, 女性:.250\*\*)」と正の相関があった。また、女性は「育児への肯定感」と負の相関(-.238\*\*)があった。具体的には、子育て中の親は、家庭以外で子どもや子育て仲間と交流する場を得ていると感じることで、子育てに関する否定的な感情を軽減できる可能性がある。また、居場所づくりへのサポートは、女性の育児への肯定的感情を高めることが期待される。

表 2-8 : 親の子育て意識と育児ソーシャル・サポートに関する相関

相関			全体			男性			女性		
			I 精神的サポート	II 育児ヘルプ	III 居場所づくり	I 精神的サポート	II 育児ヘルプ	III 居場所づくり	I 精神的サポート	II 育児ヘルプ	III 居場所づくり
育児不安	I 中核的育児不安	相関係数	-.205**	.014	.325**	-.100*	.169**	.376**	-.271**	-.171**	.305**
		有意確率 (両側)	.000	.638	.000	.016	.000	.000	.000	.000	.000
		度数	1133	1133	1133	586	586	586	547	547	547
	II 育児感情	相関係数	.095**	.155**	.260**	.148**	.276**	.287**	-.007	.028	.222**
		有意確率 (両側)	.001	.000	.000	.000	.000	.000	.862	.510	.000
		度数	1133	1133	1133	586	586	586	547	547	547
	III 育児時間	相関係数	-.057	.022	.317**	.073	.126**	.365**	-.137**	-.117**	.313**
		有意確率 (両側)	.054	.462	.000	.077	.002	.000	.001	.006	.000
		度数	1133	1133	1133	586	586	586	547	547	547
育児感情	I 育児への負担感	相関係数	-.238**	.003	.252**	-.164**	.143**	.343**	-.232**	-.193**	.234**
		有意確率 (両側)	.000	.926	.000	.000	.001	.000	.000	.000	.000
		度数	1133	1133	1133	586	586	586	547	547	547
	II 育児への不安感	相関係数	-.147**	.031	.280**	-.132**	.100*	.330**	-.137**	-.061	.250**
		有意確率 (両側)	.000	.296	.000	.001	.015	.000	.001	.156	.000
		度数	1133	1133	1133	586	586	586	547	547	547
	III 育児への肯定感	相関係数	.420**	.193**	-.186**	.538**	.177**	-.124**	.338**	.219**	-.238**
		有意確率 (両側)	.000	.000	.000	.000	.000	.003	.000	.000	.000
		度数	1133	1133	1133	586	586	586	547	547	547

### 第3節：第2章の考察

#### 第1項：子育て家庭の実情から求められる保育施設の役割

回答者の子育て家庭の実情として、次の3点を把握することができた。

(1)核家族世帯が多く、3世代同居世帯は少ない

(2)子どもの数が少なく、少子家庭の傾向がある

(3)男性の中には、恒常的な残業や20時以降に帰宅する就労状況があり、女性との働き方に違いがある

本調査において、核家族世帯の一般化や少子家庭、男性の恒常的な残業に伴う女性への育児負担が偏るとされる子育て家庭の実情は、わが国の子育て家庭に指摘される課題を反映する結果となった。特に共働き家庭においては仕事と家庭の両立が難しいことが推察できる。また、専業主婦家庭においても、男性の恒常的な残業や帰宅時間の遅延により女性への育児負担の偏りは顕著であった。そのため、子育て家庭が支援を必要としたときに、配偶者や祖父母に代わる社会的支援が不可欠であることがわかった。父親・母親の双方を子育て支援の対象として、身近な子育て支援の場として、子育て家庭の子育てを補完する保育施設の役割が必要と考える。

#### 第2項：保育施設に求められる育児ソーシャル・サポート

親の子育て意識と育児ソーシャル・サポートとの相関分析により把握された子育て家庭における社会的支援の実情は、次の(1)～(4)のとおりである。

(1)育児不安や育児感情に関する親の子育て感情は、配偶者からの「精神的サポート」と関連がある。

(2)親の育児不安を緩和させる要因として、子どもと親が安心して集い、子ども同士が遊び、親同士が交流できる「居場所」をつくることが有効である。

(3)男性の肯定的な育児感情は、育児サポートの前提となる夫婦間の関係性を基盤とする「精神的サポート」と強い相関がある。

(4)保育の専門家や育児代替の共助的サポートである「育児ヘルプ」は女性の育児肯定感と相関があるのに対し、男性では否定的育児感情と相関がある。

子育て家庭における社会的支援の実情から、保育施設に求められる育児ソーシャル・サポートについて考察を加える。

第一に、子育て環境に関連する「精神的サポート」は、夫婦の関係性を基盤とした育児支援の核となる。しかし、男性の恒常的な残業や帰宅時間の遅さから、夫婦で子育てについて語り合い、いつでも相談できる関係づくりが困難な実情が明らかとなった。

保育施設における育児ソーシャル・サポートは、夫婦間の会話の大切さを伝え、子育てに関する共通理解の橋渡しとなる役割が重要となる。また、身近な理解者として親の思いを受け止める役割を担えるように、親との信頼関係づくりが不可欠である。また、「精神的サポート」は、男性の肯定的育児感情と強い相関が認められた。少子化や父親の就労状況の実態から、子どもとのかかわりが不慣れで、日頃から子どもとのかかわる時間を取りにくい男性にとって、配偶者の理解やサポートが不可欠である。男性の育児参加を促進するためには、配偶者の理解や会話といった、よりよい夫婦関係づくりを支えることが公的支援の鍵となる。

第二に、保育の専門家や配偶者以外の他者からの「育児ヘルプ」は、保育施設や子育て仲間がいると考えられる女性には部分的に効果があった。女性は、保育施設における専門的な支援や子育て仲間との共助的關係の中で子育てを楽しんでいると感じ、子育てを肯定的に捉えていることが明らかとなった。しかし、保育施設や地域との関係性の希薄な男性にとっては不安感情を高め、逆効果となることもわかった。保育の専門家や子育て仲間のサポートを得にくい男性の生活実態を鑑みると、保育施設の利用頻度や保育者との関係性構築が課題となる。

保育施設に求められる育児ソーシャル・サポートは、男性に限らず、支援者側の一方的な押し付けは効果が低いことを認識し、利用する親の思いやニーズに寄り添うことを重視しなければならない。保育施設は、親との信頼関係づくりをめざし、性別に関係なく参加しやすい雰囲気づくりや仕事をもつ父親・母親も継続的に参加できる活動内容を検討することが重要と考える。また、父親・母親が保育施設で生活する子どもたちの姿や保育者の働きかけに触れることで、

子どもの成長過程や必要な働きかけを感じる機会にもなる。保育施設として父親・母親の支援ニーズに寄り添いながらも、子育て家庭が子どもの健やかな育ちにとってよりよい環境となるように、必要に応じた指導・助言ができる関係づくりが支援の鍵となる。

第三に、同年代の子ども同士が一緒に遊んだり、親同士が交流できる機会をもつ等、家庭以外での「居場所づくり」は、性別にかかわらず育児不安や否定的育児感情の軽減に有効な可能性が示された。孤育てを解消するためには、地域の中で同年代の子どもや親同士が集い交流できる居場所づくりが必要である。

保育施設は、地域に暮らす子どもと親が安心して集まる場を提供し、親子が共に参加できる活動を実施することができる。さらに、保育施設と地域の人材や専門施設と連携しながら、地域の子育て情報発信基地としての役割を担うことも可能である。保育施設が子育て家庭同士の交流の場となり、専門家の見守りのもとに他の親子のかかわりや子どもの姿に触れることで、子育ての楽しさや大切さを自覚化する機会となるのではないだろうか。また、子育て仲間との交流により、父親・母親が互いの気持ちを知る機会となり、子育て意識の変容が期待できると考える。

以上のことから、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポートが目指す方向性は、子育て家庭が抱える支援ニーズを補完し、親と子どもが安心できる子育て環境づくりを支えていくことである。そのためには、子育て家庭の基盤である夫婦関係の大切さを再確認し、子育ての自助を高めることで家庭の養育力の向上と安定を図ることが不可欠である。そこから、子育て家庭を支える親族や親しい友人からの支援が得られる関係性をつくり、親が地域と繋がる力を育てることで子育て共助機能が促進するものと考ええる。さらに、子どもが健やかに育ち、全ての親が子育てを楽しむことで地域とのかかわりも積極的になるのではないだろうか。こうした、子育て中の親が地域コミュニティの中で活躍できる社会の仕組みづくりにおいて、地域の子育て支援拠点である保育施設の果たす役割は大きいと考える。

今後は、実際に子育て支援プログラムに参加している父親・母親へのヒアリ

ング調査を実施し、保育施設利用についての不安感やストレスの要因や求められる支援内容を探ることが必要と考える。また、今回用いた分析尺度の精度を高め、分析項目を精選することで回答者の負担を軽減することも必要と考える。さらなる研究を重ねて、育児ソーシャル・サポートの可能性について探り、実践的な取り組みや支援効果について明らかにしていきたい。

### 第3章：育児ソーシャル・サポート尺度の開発

#### 第1節：第3章の調査概要

##### 第1項：第3章の研究目的

第3章では、子育て家庭が抱える育児負担や育児不安等を緩和し、子育て家庭に対する支援内容の充実を図るために、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度の開発をおこなうものである。本研究では、手島・原口(2003)が開発した「育児ソーシャル・サポート尺度」<sup>34)</sup>をもとに、新たに保育施設における子育て支援項目を加え、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度の因子構造と信頼性について検討することを目的とする。

研究を通して子育て家庭に内在する支援ニーズを父親・母親の双方を観点として顕在化し、保育施設が補完すべき支援内容について把握を試みる。

##### 第2項：第3章の研究方法

###### 1. 調査概要

本研究は、全国の乳幼児期の子どももつ父親・母親を対象としてWeb調査を実施した。調査方法は、研究対象者へアンケート案内メールを配信し、URLアクセス法により回答を求めた。調査は、2015年9月にアンケートを配信し、10月上旬を回収期限とした。

###### 2. 調査項目

本研究の調査項目は、次のとおりである。

- (1)回答者の属性について
- (2)子育て意識と育児ソーシャル・サポートの必要性について

###### 3. 尺度項目について

親の育児不安の緩和要因を探る尺度として、手島・原口(2003)の「育児ソーシャル・サポート尺度」を用いる<sup>35)</sup>。育児ソーシャル・サポート尺度は、第一因子「精神的サポート」、第二因子「育児ヘルプ」及び第三因子「居場所づくり」

の3つの下位因子によって構成されている。原口・手島(2006)で用いられた20項目と新尺度開発のために新たに追加した7項目を合わせた全27項目について、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までを程度に従い4件法を用いて得点を付する。

本調査は乳幼児期の子どもをもつ父親・母親を調査対象としていることから、回答者本人を「あなた」、その夫・妻を「配偶者」と表記する。さらに、子育て家庭における子育て機能を補完する保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度を開発するために、設問12の「育児の仕方を相談できる人」として「保育者」を加筆するとともに、設問14～20に、保育施設及び保育者に関する7項目を追加して、調査を試みる。追加した設問は、次のとおりである。

- 設問14. 子育てに困ったときには気軽に相談できる保育の専門家(保育者)が身近にいる
- 設問15. 子どもの成長を気にかけてくれる保育の専門家(保育者)が身近にいる
- 設問16. 子どもの心配事があるときにすぐ相談できる保育施設がある
- 設問17. 子どもを安心して遊ばせられる保育施設が身近にある
- 設問18. 子どもと歩いて遊びに行ける保育施設が身近にある
- 設問19. 子育てについて専門的な知識を得る機会がある
- 設問20. 短時間でも預かってくれる保育施設が身近にある

#### 4. 分析方法

本研究では、先行研究によって開発された育児ソーシャル・サポート尺度を手がかりとして新たに保育施設に関する項目を追加し、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度の開発を試みる。そのため、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度の因子構造を最小二乗法による因子分析によって明らかにする。その結果得られた因子構造にそって下位尺度の $\alpha$ 係数を算出し、それらの内的整合性を検証し、信頼性について検討を試みる。



## 第2節：第3章の結果

### 第1項：回答者の属性

回答者数は、1,133名であり、回答者全員が乳幼児期の子どもをもつ子育て中の父親・母親である。調査対象者の属性では、性別に大きな偏りはなかった。年齢では、父親の10代を除き、10代から60代までの広い年齢層から回答を得ることができた。乳幼児期の子どもをもつ父親・母親の年齢層に広がりがあることは、現代社会における晩婚化、高齢出産等の実情とも重なるものといえる。世帯構成では、父親・母親ともに「夫婦と子ども」が全体の83%以上を占めており、核家族世帯が一般化した子育て家庭の実情が認められた。回答者属性に関する結果の詳細は、表3-1～表3-3のとおりである。

表3-1：回答者の属性 (%)

父親	母親
51.7	48.3

表3-2：回答者の年齢（性別） (%)

年齢	20～ 24歳	25～ 29歳	30～ 34歳	35～ 39歳	40～ 44歳	45～ 49歳	50代	60代 以上	無回答
父親	-	1.5	20.3	7.5	16.9	17.4	8.7	25.9	1.7
母親	0.4	2.7	28.7	14.3	15.4	33.3	5.1	0.2	-

表3-3：回答者の世帯構成（性別） (%)

世帯 構成	夫婦と 子ども	ひとり親と 子ども	子どもと 親とその親	その他
父親	83.6	1.4	12.8	2.2
母親	83.2	5.3	11.3	0.2

### 第2項：尺度分析

#### 1. 因子分析

先行研究の因子の内容から、育児ソーシャル・サポート尺度を構成する因子間には、一定の相関関係があると考えられるため、本研究では、因子分析をおこなう際に最小二乗法及びプロマックス回転を用いて因子を抽出した。その結果、5因子を抽出した。

手島・原口(2003)<sup>36)</sup>によって開発された育児ソーシャル・サポート尺度は、「育児ヘルプ」「精神的サポート」「居場所づくり」の3因子構造であったが、

保育施設に関する項目を加えて再検定した結果、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度として、第一因子「保育の専門家による育児ヘルプ」、第二因子「精神的サポート」、第三因子「居場所」、第四因子「短時間の託児」及び第五因子「身近な人による育児ヘルプ」の5因子が抽出された。

さらに $\alpha$ 係数を算出した結果、各因子の内的整合性は高いと考えられた。因子分析の結果の詳細は、表3-4のとおりである。

## 2. 分析過程

具体的な分析過程は、次の(1)～(4)のとおりである。

(1)固有値1.0以上を基準としたところ、5因子の抽出が妥当と考えた。累積寄与率は61.084%であった。

(2)5因子で抽出したところ、設問2, 8, 9, 20については、因子負荷量が低い(.40以上)ため除外した。また、設問17については、共通性が低い(.2未満)ため除外した。

(3)上記項目を削除し再度因子分析をおこない、因子名を検討した。

第一因子は、設問24「子どもを安心して遊ばせられる保育施設が身近にある」、設問26「子育てに困ったときには気軽に相談できる保育の専門家(保育者)が身近にいる」、設問25「子どもと歩いて遊びに行ける保育施設が身近にある」、設問27「子どもの成長を気にかけてくれる保育の専門家(保育者)が身近にいる」、設問22「短時間でも預かってくれる保育施設が身近にある」、設問21「子どもの心配事があるときにすぐ相談できる保育施設がある」、設問23「子育てについて専門的な知識を得る機会がある」の項目で構成されており、「保育の専門家による育児ヘルプ」と命名した。

第二因子は、先行研究における「精神的サポート」、第三因子は「居場所」の項目で構成されているため、先行研究と同様の因子名とした。

第四因子は、設問16「歯医者や美容院等に行きたいとき、預かってくれる人がいる」と設問4「短時間でも預かってくれる人が近くにいる」から構成されるため、「短時間の託児」と命名した。

第五因子は、設問19「子どもの心配事があるときに相談できる人がいる」、設問15「子育てをする中で感じた事を安心して話すことができる人がいる」、設問12「母乳育児や離乳食等子育てについて話し合える人が身近にいる」、設問3「育児の仕方を相談できる人（例：医師，保健婦・保育者等の専門家）がいる」から構成されるため「身近な人による育児ヘルプ」と命名した。

(4)各因子について $\alpha$ 係数を算出し、信頼性の検討をおこなったところ、「保育の専門家による育児ヘルプ」(.918)、「精神的サポート」(.809)、「居場所」(.822)、「短時間の託児」(.797)、「身近な人による育児ヘルプ」(.816)の全ての因子で、内的整合性が高いと判断された。

表 3-4 : 育児ソーシャル・サポート尺度因子抽出結果

	因子負荷量					共通性
	I	II	III	IV	V	
<b>I. 保育の専門家による育児ヘルプ (<math>\alpha = .918</math>)</b>						
Q23. 24. 子どもを安心して遊ばせられる保育施設が身近にある。	.830	.043	-.052	.071	-.117	.677
Q23. 26. 子育てに困ったときには気軽に相談できる保育の専門家(保育者)が身近にいる。	.814	-.013	.017	-.067	.144	.743
Q23. 25. 子どもと歩いて遊びに行ける保育施設が身近にある。	.794	.027	.003	.005	-.082	.585
Q23. 27. 子どもの成長を気にかけてくれる保育の専門家(保育者)が身近にいる。	.790	.019	.034	-.062	.138	.715
Q23. 22. 短時間でも預かってくれる保育施設が身近にある。	.735	-.035	.002	.096	-.087	.529
Q23. 21. 子どもの心配事があるときにすぐ相談できる保育施設がある。	.729	.010	-.041	-.002	.108	.633
Q23. 23. 子育てについて専門的な知識を得る機会がある。	.652	.017	.036	-.070	.192	.547
<b>II. 精神的サポート (<math>\alpha = .814</math>)</b>						
Q23. 6. 子どもの心配事があるとき配偶者に相談できる。	-.061	.791	.064	-.064	.202	.732
Q23. 5. その日の子どもの様子を夫婦で話し合うことができる。	-.002	.763	.052	-.105	.207	.696
Q23. 10. 配偶者はあなたをよく理解してくれる。	.004	.732	.030	-.038	.124	.610
Q23. 13. 配偶者はあなたの代わりに育児や家事ができる。	.127	.718	.025	.092	-.303	.472
Q23. 1. 私一人で子どもを育てている。	.039	-.520	.250	-.113	.396	.319
<b>III. 居場所 (<math>\alpha = .822</math>)</b>						
Q23. 11. 同じ年くらいの子どものをもつ親と話す機会がない。	.011	.107	.805	.034	-.113	.661
Q23. 14. 同世代の子どもを持つ家族とのつきあいがいい。	.000	.016	.797	.054	-.083	.644
Q23. 7. 同じ年くらいの子どものと遊ばせる機会がない。	-.089	.028	.713	-.003	.137	.507
Q23. 18. 子育てのことを継続的に話せる機会がない。	.077	-.085	.622	.033	-.124	.426
<b>IV. 短時間の託児 (<math>\alpha = .797</math>)</b>						
Q23. 16. 歯医者や美容院などに行きたいとき、預かってくれる人がいる。	-.011	.042	.057	.770	.175	.764
Q23. 4. 短時間でも預かってくれる人が近くにいる。	.016	-.094	.074	.692	.169	.568
<b>V. 身近な人による育児ヘルプ (<math>\alpha = .816</math>)</b>						
Q23. 19. 子どもの心配事があるときに相談できる人がいる。	-.010	.040	-.103	.207	.681	.700
Q23. 15. 子育てをする中で感じた事を安心して話すことができる人がいる。	-.026	.144	-.073	.208	.619	.673
Q23. 12. 母乳育児や離乳食など子育てについて話し合える人が身近にいる。	.145	-.016	-.128	.127	.510	.478
Q23. 3. 育児の仕方を相談できる人(例: 医師, 保健婦・保育者等の専門家)がいる。	.230	-.069	.056	.041	.490	.392
<b>因子間相関</b>						
		I	II	III	IV	
	II	.271				
	III	-.069	-.086			
	IV	.405	.360	-.134		
	V	.499	.460	-.124	.479	

### 第3節：第3章の考察

本研究は、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポートに関する測定尺度を開発し、その因子構造と信頼性について検討することを目的とした。因子分析の結果、「保育の専門家による育児ヘルプ」因子、「精神的サポート」因子、「居場所」因子、「短時間の託児」因子、「身近な人による育児ヘルプ」因子の5因子、計22項目からなる「保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度」が開発された。

具体的な下位因子項目の内容は、次のとおりである。

第一因子：「保育の専門家による育児ヘルプ」

保育施設及び保育の専門家による育児支援に関する項目

第二因子：「精神的サポート」

特に身近な配偶者からの精神的支援に関する項目

第三因子：「居場所」

父親・母親が子どもと一緒に集い交流できる環境に関する支援に関する項目

第四因子：「短時間の託児」

父親・母親が必要なときに安心して子どもを預けられる託児に関する支援に関する項目

第五因子：「身近な人による育児ヘルプ」

配偶者・保育の専門家とは異なる人による育児支援に関する項目

さらに、抽出された5因子についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出し信頼性の検討を試みた結果、高い水準により内的整合性が満たされていると判断されたことから、作成された尺度には一定の信頼性が備わっていることが確認された。

以上により、本研究において作成された保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度は乳幼児期の子どもをもつ父親・母親の育児支援ニーズを測定するに相応しいものであると考えられる。

本研究を通して開発された保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度の特徴として、次の2点があげられる。

第一に、父親・母親の双方を観点とした子育て支援のニーズを測定すること

ができる。父親・母親の子育て支援ニーズを測定し、子育て家庭における支援ニーズを明らかにすることにより、父親・母親の間に内在する意識の乖離を顕在化することができる。

第二に、保育施設に求められる子育て支援内容を具体的に把握することができる。保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度を用いて子育て家庭が抱える課題やニーズを測定し、可視化することによって、保育施設に求められる支援内容を具体的に把握することができる。したがって、保育施設による一方向的な支援提供だけではなく、子育て家庭と保育施設が相互補完的に必要な支援の提供が可能となる。

このように父親・母親を子育ての主体として位置付けながらも、保育の専門家が補完的役割を担うことで安定的な子育て支援の提供が実現できると考える。保育施設における社会的支援を受け、子育て家庭の環境が改善されることで、父親・母親が共助する子育てが可能となり、母親への育児負担の緩和につながるものと考えられる。保育施設が子育て支援の拠点になり、子育て家庭が本来もっている共助機能が発揮されることで、子どもの成長発達に望ましい子育て環境を安定的に提供できると考える。

今後は、子育て支援を実施する保育施設において質問紙調査を実施するためには、尺度項目を精選することで回答者の負担を軽減し、尺度の精度を高めることが不可欠である。また、父親・母親の子育て意識との関連についても分析をおこない、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポートの有用性についても検討を進めていく予定である。

## 第4章：育児ソーシャル・サポートにおける保育施設の可能性

### 第1節：第4章の調査概要

#### 第1項：第4章の研究目的

日本の子育ては、子どもを育てる側の親自身が成長・発達することの重要性について、十分に認識されていないと指摘されている。子どもが自ら育つ力を尊重し、子どもの健全な育ちを保障する子育て支援を実現するためには、子どもが健全に育つ条件となる親子や夫婦関係を基盤とした家族と社会のつながりに着目した子育て家庭への支援のあり方を希求することが課題となる。

特に、子どもの健全な育ちを保障するためには、否定的育児感情を緩和し、子どもの育ちにふさわしい親子関係を安定化させることが必要となる。また、子育てには、夫婦のコミュニケーションや相互の理解が不可欠である。保育施設が担う子育て支援は、子どもの育ちに影響を与える親の育児感情、親子関係、夫婦関係を総合的に支援する取り組みである。

第4章の目的は、子育て家庭に特化したソーシャル・サポートを、「育児ソーシャル・サポート」と定義し、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポートが孤育てを解消し、社会と子育て家庭の関係を繋ぐ子育て支援に寄与するかを検証するものである。具体的には、第一に、前章で開発した「保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度」を用いて、親の子育てにかかわる意識との関連について明らかにする。本研究では、先行研究で明らかにされた子どもの育ちに影響を与える3つの観点に着目し、父親・母親の育児ソーシャル・サポート意識との関連について明らかにする。子どもの育ちに影響を与える3つの観点は、①親の育児感情、②親子関係、③夫婦関係とする。第二に、核家族化や地域コミュニティの希薄化等、子育てに厳しい環境の中で子どもを育てる父親・母親が求める支援ニーズの特徴を把握する。

本研究は、子どもの育ちを保障するために、親の育児感情、親子関係、夫婦関係を安定させることで、子どもが自ら育つ家庭環境を支える社会的支援を促進するために、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポートの開発を目的とした研究の一部である。

## 第2項：第4章の調査方法

### 1. 調査概要

本研究では、無記名自記入による質問紙調査を実施した。調査は、A 県内の同一学校法人立の3園、家庭数605の保護者1,210人を対象に、園からの配布によって2016年10月に実施した。有効回答数は1,000であり、回収率は82.6%であった。(父親485名、母親515名、計1,000名：回収率82.64%)

本研究では、乳幼児期の子どもをもつ父親・母親の育児ソーシャル・サポートと親の子育てにかかわる意識との関連を明らかにすることを目的としている。そのため、乳幼児期の子どもをもつ父親・母親を調査対象とした。また、育児負担や閉鎖的な子育て環境の背景に女性の就労の有無が関係していることから、就労の有無に偏りが少ないと推測される幼稚園児をもつ保護者を対象とする。

### 2. 調査項目

本研究の調査項目は、(1)～(4)のとおりである。

- (1) 育児ソーシャル・サポートに関する項目
- (2) 親の育児感情に関する項目
- (3) 親子関係に関する項目
- (4) 夫婦関係に関する項目

上記の項目について得られた回答から、次の3つの関係性を明らかにする。

第一に、親の育児ソーシャル・サポートと育児感情との関連、第二に、親の育児ソーシャル・サポートと親子関係との関連、第三に、親の育児ソーシャル・サポートと夫婦関係との関連である。

本研究では、育児感情に関する分析尺度として「育児感情尺度」、親子関係に関する分析指標として

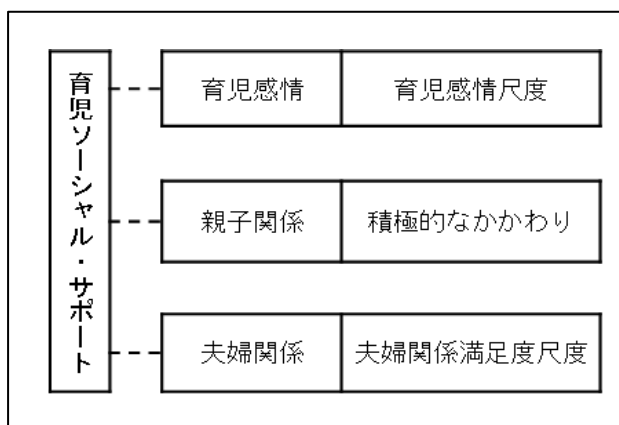


図4-1：育児ソーシャル・サポートとの  
相関分析項目



「積極的なかわりチェックリスト」, 夫婦関係に関する分析尺度として「夫婦関係満足度尺度」を用いる。具体的な相関分析の観点は図 4-1 のとおりである。

### 第 3 項：尺度概要

#### 1. 育児ソーシャル・サポート尺度

保育施設を拠点にした父親・母親の育児支援ニーズを測定するために開発された、前章で開発された「保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度」を用いる<sup>37)</sup>。「保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度」は、第一因子「保育の専門家による育児ヘルプ」、第二因子「精神的サポート」、第三因子「居場所」、第四因子「短時間の託児」、第五因子「身近な人による育児ヘルプ」、の 5 つの下位因子によって構成されている。下位因子について  $\alpha$  係数を算出した結果、いずれも高い信頼性が認められている。保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポートの測定に用いる因子項目の概要は、次のとおりである。

第一因子：保育の専門家による育児ヘルプ：保育施設及び保育の専門家による育児支援に関する項目

第二因子：精神的サポート：特に身近な配偶者からの精神的支援に関する項目

第三因子：居場所：父親・母親が子どもと一緒に集い交流できる環境に関する支援に関する項目

第四因子：短時間の託児：父親・母親が必要なときに安心して子どもを預けられる託児に関する支援に関する項目

第五因子：身近な人による育児ヘルプ：配偶者・保育の専門家とは異なる人による育児支援に関する項目

本研究では、信頼性が認められた「保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度」に関する全 22 項目について、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までを程度に従い 4 件法を用いて評定する。

## 2. 育児感情尺度

親の育児負担を探る尺度として、荒牧(2008)が開発した「育児感情尺度」を用いる<sup>38)</sup>。「育児感情尺度」は、第一因子「育児への負担感」、第二因子「育児への不安感」、第三因子「育児への肯定感」、の3つの下位因子によって構成されている。下位因子尺度の $\alpha$ 係数を算出した結果、いずれもおおむね十分に高く、信頼性が確認されている。親の育児感情の測定に用いる因子項目の概要は、次のとおりである。

第一因子：育児への負担感：育児への束縛による負担感の項目／子どもへの態度・行為への負担感の項目

第二因子：育児への不安感：育て方への不安感／育ちへの不安感の項目

第三因子：育児への肯定感：育児への肯定感の項目

本研究では、信頼性が認められる親の育児感情の21項目について、「よくある」から「まったくない」までを程度に従い4件法を用いて評定する。

## 3. 積極的なかかわり」チェックリスト

親子関係を評価する尺度の中から、米国国立小児保健・人間発達研究所(NICHHD)が全米の1,300人ほどの新生児を対象にした長期追跡調査に使用した「積極的なかかわり」チェックリスト(The Positive Caregiving Checklist)を評価に用いる。本調査では、佐藤ら(2014)が自己評価版に改定し、信頼性が確認された質問項目を用いることとする<sup>39)</sup>。

「積極的なかかわり」は、以下に示す9つの項目から構成されている。

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>(1) 積極的な態度を示す</li><li>(2) 積極的な身体接触をする</li><li>(3) 子どもに質問する</li><li>(4) 子どもの発声や発話に応答する</li><li>(5) その他の子どもへの話しかけ：ほめる/学びの手助けをする/お話を語ったり、歌を歌ったりする</li><li>(6) 発達を促す</li><li>(7) 社会的な行動の奨励</li><li>(8) 読む力を伸ばす</li><li>(9) 否定的なかかわりを回避する</li></ul> |
|--|

本研究では、9つの項目からなる全11の質問に「あなたの子育てを振り返るとき、次のようなことをしていますか」という設問に、「とてもそう思う(5点)」

「ややそう思う(4点)」、「どちらでもない(3点)」、「あまりそう思わない(2点)」、「まったくそう思わない(1点)」の5つの選択肢を設け、各選択肢に得点を付した。

#### 4. 夫婦関係満足度尺度

夫婦関係の満足度を探る尺度として、ノートン(1983)が、夫婦の関係全体の良さ (goodness of the relationship) を反映する項目に限定して作成した QMI (Quality Marriage Index) を諸井 (1996) が翻訳することにより作成された「夫婦関係満足度尺度」を用いる<sup>40)</sup>。採点方法は、6項目の単純合計得点を夫婦関係満足度得点とする。本研究では、先行研究に基づき、全6項目について、「かなりはてはまる(4点)」、「どちらかといえばあてはまる(3点)」、「どちらかといえばあてはまらない(2点)」、「ほとんどあてはまらない(1点)」の4つの選択肢を設け、各選択肢に得点を付した。

### 第2節：第4章の結果

#### 第1項：回答者の属性及び就労状況

本研究では、子育ての主体である親(父親・母親)を対象とした。回答者の性別に偏りはなかった。年齢では、「35～39歳」が父親・母親共に最も多く、30～44歳前半の乳幼児期の子どもをもつ子育て世代が全体の79.2%を占めた。世帯構成については、「夫婦と子ども」が全体の76.5%を占め、多世代世帯が10.4%という結果となった。

回答者の就労状況は、父親は、「正社員(恒常的に残業あり)」が44.7%、次いで「正社員(おおむね定時退社)」13.6%であった。母親は、「専業主婦」が41.9%と最も多く、次いで「パート・アルバイト」が30.1%という結果となった。平日の帰宅時間は、男性は「19～20時まで」が19.2%と最も多く、次いで「18～19時まで」が15.1%であった。女性は、「自宅にいる」が最も多く、次いで「17時前」という結果であった。

回答者の属性を概観すると、幼稚園児をもつ父親の70%以上が正社員勤務で、

その内、44.7%の父親は恒常的な残業を有していた。その内、13.2%の父親は不規則勤務の実態が明らかとなった。幼稚園児をもつ母親の41.9%は専業主婦で、約半数（49.9%）の母親は何らかの形で就労していることが把握された。就労の有無に偏りなく、母親の子育てに関する意識を把握することが可能と考える。回答者の属性及び就労状況から、現代を代表する核家族世帯における子育て家庭の実情を反映しているものと捉えることができた。

回答者の属性についての詳細は、表4-1～表4-5のとおりである。

表4-1：回答者の属性 (%)

父親	母親
48.5	51.5

表4-2：回答者の年齢 (%)

年齢	20～ 24歳	25～ 29歳	30～ 34歳	35～ 39歳	40～ 44歳	45～ 49歳	50代	60代以上	無回答
父親	-	2.3	21.2	27.2	25.2	7.6	1.6	0.2	14.6
母親	0.2	7.0	28.7	33.6	22.1	2.9	0.6	-	4.9

表4-3：回答者の世帯構成 (%)

夫婦と子ども	ひとり親と子ども	子どもと親とその親	その他	無回答
76.5	1.4	10.4	1.7	10.0

表4-4：回答者の就労状況（性別） (%)

	(定時)正社員	(残業)正社員	(短時間)正社員	(不規則)正社員	(在宅)正社員	派遣・契約社員	パート・アルバイト	家族従業員・自営業	在宅ワーク	内職・在宅	(夫)専業主婦	無職	その他	無回答
父親	13.6	44.7	0.2	13.2	0.4	0.2	-	11.5	-	-	0.2	1	14.8	
母親	4.9	2.1	2.5	1.7	-	2.5	30.1	5.4	1.0	41.9	1.2	1.6	5.0	

表4-5：回答者の帰宅時間（性別） (%)

	17時前	17時～18時 #y	18時～19時 #y	19時～20時 #y	20時～21時 #y	21時～22時 #y	22時以降	不規則	自宅にいる	その他	無回答
父親	1.2	5.2	15.1	19.2	14.6	6.6	7.8	12.6	1.2	1.9	14.6
母親	24.7	6.8	5.8	2.3	0.4	0.4	0.2	4.5	36.5	3.7	14.8

## 第2項：相関分析の結果

### 1. 育児ソーシャル・サポートとの関連

育児ソーシャル・サポートと親の育児感情、親子関係及び夫婦関係との関係性を調べるために、相関分析をおこなった。結果は(1)～(3)のとおりである。

#### (1) 育児感情：育児感情尺度

親の育児ソーシャル・サポートと「育児感情」との関連を調べるために、相関分析をおこなった。育児ソーシャル・サポートと育児感情の間には、弱い負の相関（相関係数 0.2 以上, 0.4 未満, 以下同じ）が認められた。育児感情尺度は、「育児への負担感」「育児への不安感」「育児への肯定感」の3つの因子から構成されていたため、「育児への肯定感」の値は逆転項目として算出した。したがって、育児ソーシャル・サポート得点が高いと、「育児への負担感」や「育児への負担感」といった育児感情はやや減少し、「育児への肯定感」はやや高くなる傾向が把握された。

#### (2) 親子関係：積極的なかかわり

育児ソーシャル・サポートと親子関係との関連を調べるために、「積極的なかかわり」について相関分析をおこなった。育児ソーシャル・サポートと「積極的なかかわり」の間には、低い正の相関が認められた。育児ソーシャル・サポート得点が高いと、子どもへの働きかけや子どもへの前向きな態度等、積極的なかかわり意識も高くなる傾向が認められた。

#### (3) 夫婦関係：夫婦関係満足度

育児ソーシャル・サポートと夫婦関係との関連を調べるために、「夫婦関係満足度」について相関分析をおこなった。育児ソーシャル・サポートと「夫婦関係満足度」の間には、低い正の相関が認められた。育児ソーシャル・サポート意識が高いと、結婚生活や夫婦の絆の強さ、幸福だと思える気持ち等、夫婦関係の満足度もやや高くなる傾向が認められた。

結果の詳細については、表 4-6 のとおりである。尚、低い相関（相関係数 0.2 以上, 0.4 未満）については網掛け 1 ■ を付記する。中程度の相関（相関係数 0.4 以上, 0.7 未満）については網掛け 2 ■ を付記する。高い相関（0.7 以上）

については網掛け3■を付記する。

表 4-6：育児ソーシャル・サポートとの関係性

尺度	育児感情	親子関係	夫婦関係
育児ソーシャル・サポート	-.297**	.388**	.394**

\*\*：相関係数は 1% 水準で有意（両側）

\*：相関係数は 5% 水準で有意（両側）

このように、育児ソーシャル・サポートとの相関関係について分析した結果、育児ソーシャル・サポートと子どもの育ちに影響する3つの観点全てに相関が認められた。育児ソーシャル・サポートは、親の育児感情、親子関係及び夫婦関係に弱いながらも全てと関連している。今回の研究では、因果関係についての検討はおこなっていないが、育児ソーシャル・サポートが、養育者である親の育児負担感、子どもの生活基盤となる家族関係に肯定的な影響があると捉えることができる。

## 2. 育児ソーシャル・サポート下位因子項目との関連

育児ソーシャル・サポートに内在される具体的支援内容との関係性を把握するために、下位因子項目との関連性についての相関関係を明らかにする。結果は、次のとおりである。相関分析の結果の詳細は、表 4-7 のとおりである。尚、低い相関（相関係数 0.2 以上, 0.4 未満）については網掛け1■を付記する。中程度の相関（相関係数 0.4 以上, 0.7 未満）については網掛け2■を付記する。高い相関（0.7 以上）については網掛け3■を付記する。

表 4-7：育児ソーシャル・サポート  
下位因子項目との関係性

育児ソーシャル・サポート (下位因子項目)	育児感情	親子関係	夫婦関係
専門家による育児ヘルプ	-.112**	.295**	.200**
精神的サポート	-.399**	.235**	.637*
居場所	.250**	-.270**	-.161**
短時間の託児	-.142**	.127**	.110**
身近な人による育児ヘルプ	-.155**	.356**	.245**

\*\*：相関係数は 1% 水準で有意（両側）

\*：相関係数は 5% 水準で有意（両側）

第一因子：専門家による育児ヘルプは、「積極的にかかわり」と「夫婦関係満足度」とに低い正の相関が認められる。

第二因子：精神的サポートは、「育児感情」と低い負の相関が認められ、「積極的にかかわり」に低い正の相関、夫婦関係満足度尺度との間には中程度の正の相関（相関係数 0.4 以上, 0.7 未満；以下, 同じ）が認められた。

第三因子：居場所は、「育児感情」と低い正の相関、「積極的にかかわり」とに低い負の相関が認められた。居場所因子は「居場所がない」「手段がない」といった否定項目で構成されている。したがって、居場所に関する支援が得られていないと感じる得点が高いと、育児に関する否定的感情は高くなり、育児に関する肯定的な感情は低くなる。また、居場所に関する支援が得られていないと感じる得点が高いほど、育児に関する積極的なかかわり意識得点も低くなる傾向が認められる。

第四因子：短時間の託児は、全ての項目と関連が認められなかった。

第五因子：身近な人による育児ヘルプは、「積極的にかかわり」、「夫婦関係満足度」に、低い正の相関が認められた。以上の結果を図式化し、図 4-2 に示した。

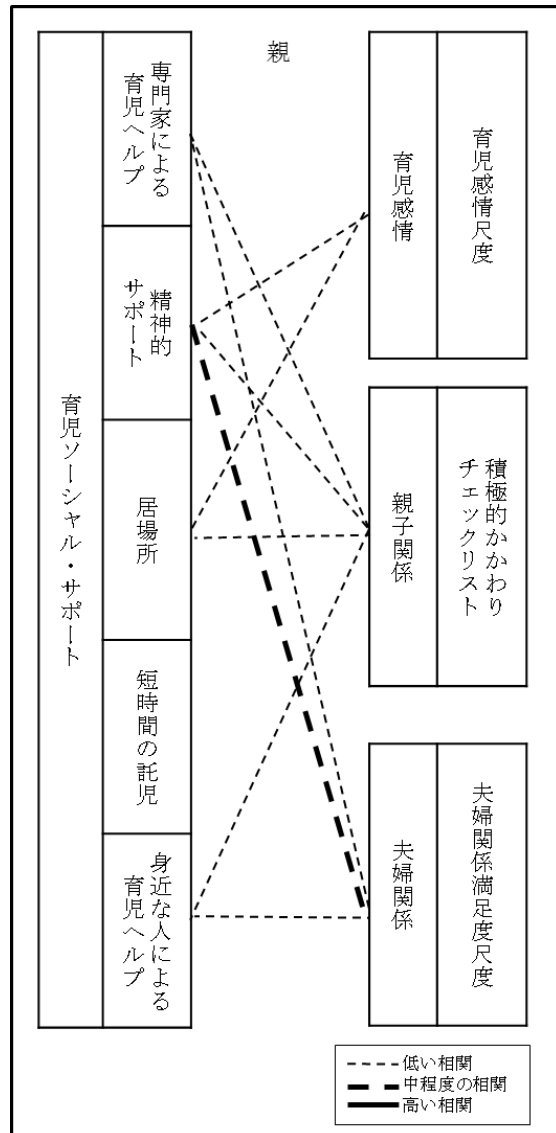


図 4-2：親の育児ソーシャル・サポート下位因子との相関図

このように、育児ソーシャル・サポート下位因子と子どもの育ちに影響する3つの観点との相関関係から、幼稚園児をもつ父親・母親に必要な支援内容について把握することができた。具体的には、(1)～(5)のとおりである。

(1) 専門家による育児ヘルプは、親子関係における積極的なかかわりと関連があ

ると共に、夫婦関係満足度にも関連が認められた。子どもを安心して遊ばせられる保育施設が身近にあることや気軽に相談できる保育者の存在が、子どもへの積極的なかかわりや夫婦関係満足度と関連していることが把握された。

(2)配偶者による精神的サポートは、親の育児負担、親子関係及び夫婦関係の全てと相関が認められた。特に、夫婦関係については中程度の関連が認められ、配偶者に対する理解や協力的な態度等の精神的サポートは、夫婦関係満足度に影響することがわかった。

(3)居場所は、親の育児負担、親子関係との相関が認められた。親は、子育て仲間との交流や子育て情報を共有できる居場所をもつことが、親の否定的な育児感情の軽減や子どもへの積極的なかかわりに影響していることが確認された。

(4)短時間の託児に関しては、相関が認められなかった。今回の調査対象は、幼稚園児をもつ父親・母親を対象とした。回答者の属性から、専業主婦の女性が約半数の割合で確認されている。幼稚園児をもつ専業主婦家庭における社会的支援として、短時間の育児への必要性が低いと推察される。

(5)身近な人からの育児ヘルプについては、親子関係と夫婦関係に関する項目に相関が認められた。身近な人からの育児ヘルプは、子どもへの積極的なかかわりに影響があり、夫婦関係の肯定感においても影響していることがわかった。

### 3. 性別からみた育児ソーシャル・サポートとの関連

社会的支援と親の育児感情、親子関係及び夫婦関係との関係性について、父親・母親の支援ニーズの特徴を把握するために、性別の観点から相関分析をおこなった。結果は、(1)～(2)のとおりである。

(1)父親：父親の育児ソーシャル・サポートと「育児感情」との間には低い負の相関、「積極的なかかわり」との間には中程度の正の相関、「夫婦関係満足度」との間には低い正の相関がある。先にも述べたように、「育児感情」は否定的因子項目として算出したため、負の相関の値を示している。

(2)母親：母親の育児ソーシャル・サポートと「育児感情」との間には中程度の負の相関、「積極的なかかわり」との間には低い正の相関、「夫婦関係満足度」



との間には中程度の正の相関が認められた。結果の詳細は、表 4-8 のとおりである。尚、低い相関（相関係数 0.2 以上, 0.4 未満）については網掛け 1 ■ を付記する。中程度の相関（相関係数 0.4 以上, 0.7 未満）については網掛け 2 ■ を付記する。高い相関（0.7 以上）については網掛け 3 ■ を付記する。

表 4-8 : 育児ソーシャル・サポートとの関係性（性別）

育児ソーシャル・サポート	育児感情	親子関係	夫婦関係
父親	-.285**	.423**	.330**
母親	-.436**	.341**	.483**

\*\* 相関係数は 1% 水準で有意（両側）

\* 相関係数は 5% 水準で有意（両側）

このように、父親と母親の育児ソーシャル・サポートと子どもの育ちに影響する 3つの観点との相関関係の諸相から、社会的支援ニーズの特徴について考察する。父親の育児ソーシャル・サポートは、親子関係を観点とする「積極的なかわり」に関連することが確認された。回答者の属性から、恒常的に残業がある正社員や帰宅時間が不規則な父親にとって、育児ソーシャル・サポートが積極的な親子関係に影響を与えることがわかった。

母親の育児ソーシャル・サポートは、育児負担を観点とする「育児感情」や夫婦関係を観点とする「夫婦関係満足度」に関連することが確認された。本研究により、育児ソーシャル・サポートとの影響は、性別によって異なる特徴を示すことが明となった。育児ソーシャル・サポートとの関連性の特徴を把握することで、父親・母親のニーズに応じた支援をおこなうことが求められる。

#### 4. 性別からみた育児ソーシャル・サポート下位因子項目との関連

育児ソーシャル・サポートに内在される具体的支援内容との関係性を把握するために、下位因子項目と親の育児感情、親子関係及び夫婦関係との関係性について性別の観点から相関分析をおこなった。結果は(1)～(3)のとおりである。

##### (1) 育児感情：育児感情尺度

第一因子：専門家による育児ヘルプに対して、父親との相関は認められなかつ

たが、母親の「育児感情」との間に低い負の相関が確認された。

第二因子：精神的サポートに対して、父親・母親共に「育児感情」との間に低い負の相関が認められた。

第三因子：居場所に対して、父親・母親共に「育児感情」との間に低い正の相関が認められた。

第四因子：短時間の託児に対して、母親の「育児感情」との間に低い正の相関が認められた。

第五因子：身近な人からの育児ヘルプに対して、父親・母親共に「育児感情」との間に低い負の相関が認められた。

## (2) 親子関係：積極的にかかわりチェックリスト

第一因子：専門家による育児ヘルプに対して、父親・母親共に「積極的にかかわり」との間に低い負の相関が認められた。

第二因子：精神的サポートに対して、父親の「積極的にかかわり」との間に中程度の正の相関、母親との間に低い正の相関が認められた。

第三因子：居場所に対して、父親の「積極的にかかわり」との間に低い負の相関が認められた。母親との間には相関は認められなかった。

第四因子：短時間の託児との間には、父親・母親共に、相関は認められなかった。

第五因子：身近な人からの育児ヘルプでは、父親・母親共に「積極的にかかわり」との間に低い正の相関が認められた。

## (3) 夫婦関係：夫婦関係満足度

第一因子：専門家による育児ヘルプに対して、父親との間には相関は認められなかった。母親の「夫婦関係満足度」の間には低い正の相関が認められた。

第二因子：精神的サポートに対して、父親の「夫婦関係満足度」との間には中程度の正の相関、母親には高い正の相関（相関係数 0.7 以上）が認められた。

第三因子：居場所に対して、母親の「夫婦関係満足度」に対して低い正の相関が認められた。父親との間には相関は認められなかった。

第四因子：短時間の託児では、父親・母親共に、相関は認められなかった。

第五因子：身近な人からの育児ヘルプでは、父親・母親共に「夫婦関係満足度」との間に低い正の相関が認められた。

以上の相関分析結果は、表 4-9 のとおりである。尚、低い相関（相関係数 0.2 以上, 0.4 未満）については網掛け 1 ■ を付記する。中程度の相関（相関係数 0.4 以上, 0.7 未満）については網掛け 2 ■ を付記する。高い相関（相関係数 0.7 以上）については網掛け 3 ■ を付記する。

表 4-9：育児ソーシャル・サポート  
下位因子項目との関係性（性別）

育児ソーシャル・サポート (下位因子項目)	父母	育児感情	親子関係	夫婦関係
専門家による育児ヘルプ	父親	-.105**	.264**	.192**
	母親	-.286**	.270**	.277**
精神的サポート	父親	-.297**	.420**	.483**
	母親	-.351**	.268**	.701**
居場所	父親	.318**	-.303**	-.159**
	母親	.332**	-.199**	-.212**
短時間の託児	父親	-.090	.092	.067
	母親	-.230**	.152**	.155**
身近な人による育児ヘルプ	父親	-.253**	.335**	.279**
	母親	-.368**	.300**	.356**

\*\*：相関係数は 1% 水準で有意（両側）

\*：相関係数は 5% 水準で有意（両側）

育児ソーシャル・サポート下位因子項目と子どもの育ちに影響する 3 つの観点との相関関係から、幼稚園児をもつ父親・母親に必要な支援内容について把握することができた。具体的な考察内容は、(1)～(5)のとおりである。

性別を観点とした相関関係を図式化し、図 4-3、図 4-4 に示した。

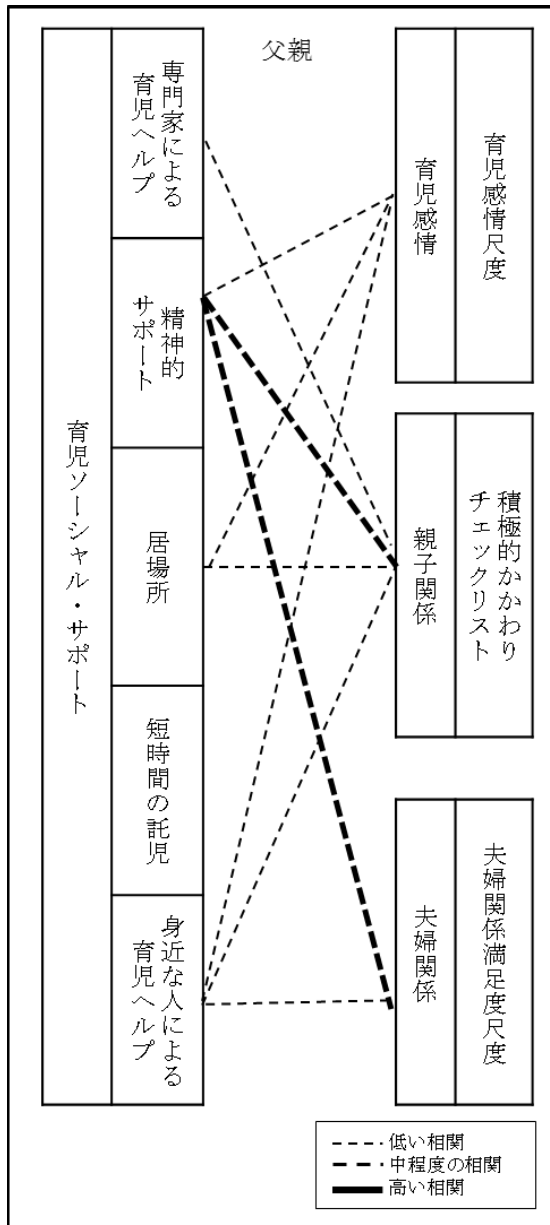


図 4-3 : 父親の育児ソーシャル・サポート下位因子との相関図

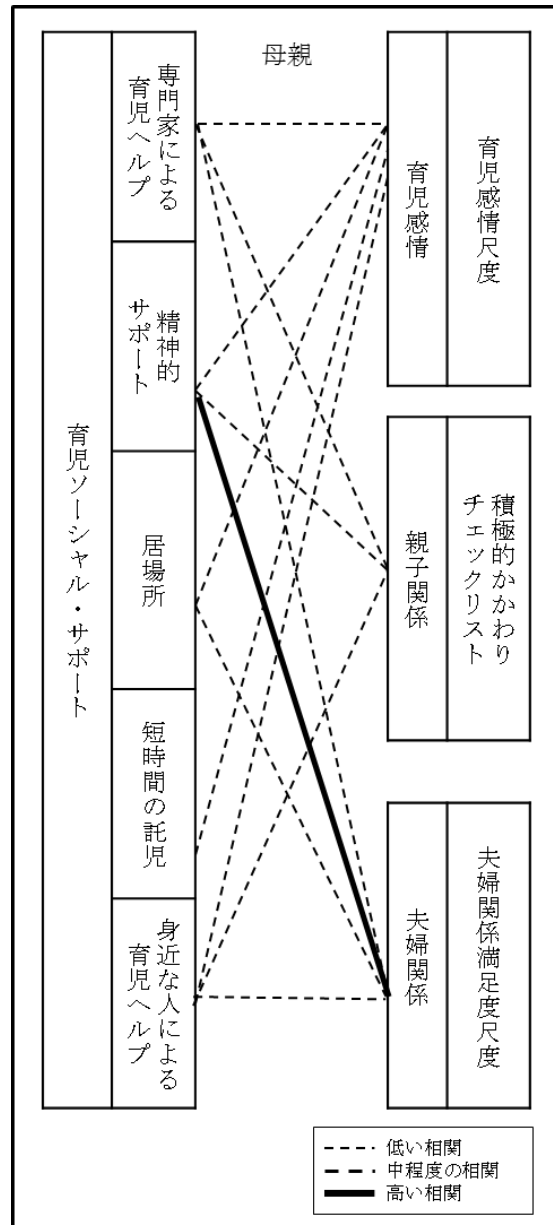


図 4-4 : 母親の育児ソーシャル・サポート下位因子との相関図

(1) 専門家による育児ヘルプは、母親の育児不安感情を低減させ、肯定的育児感情を高める効果が期待できる。また、母親の夫婦関係に関する意識の肯定感とも関係性が認められた。さらに、専門家による指導・助言といった育児ヘルプは、父親・母親共に親子関係と関連があり、父親・母親の子どもへの積極的なかかわり意識を向上させることが期待できる。

(2) 精神的サポートは、父親・母親共に全ての項目と相関関係が認められたことから、育児ソーシャル・サポートにおいて最も重要視すべき支援項目と捉える

ことができる。特に、父親・母親共に夫婦関係における関連性が高く、配偶者からの精神的サポートは、配偶者との関係性における満足度を向上させることがわかった。

(3)居場所では、父親・母親共に子育てに対する否定的感情を低減させる効果が期待できる。特筆すべき事項として、居場所は父親の親子関係との関連性が認められた。同年代の親子や子育て情報の共有、他の子どもとかかわる場があることは、父親の積極的な子育てへのかかわり意識を高める効果が期待できる。

(4)短時間の託児については、今回ほとんどの項目と関連性を認めることができなかった。回答者の属性から、父親は正規職勤務の割合が高く、母親は専業主婦が半数を占める今回の調査において、短時間の託児に関する支援ニーズの低さが伺える結果となった。

(5)身近な人からの育児ヘルプでは、母親の育児負担、親子関係、夫婦関係、全ての項目と低い相関が認められた。主として子育てを担っている母親にとって、身近な人からの育児ヘルプは健全な子育て意識を安定させるために有用となる。また、父親の育児感情、親子関係、夫婦関係にも関連がみとめられたことから、身近な人から支えられることで、肯定的な育児感情や積極的な子育て意識が高まり、夫婦関係においても向上することがわかった。

### 第3節：第4章の考察

第4章の研究成果として得られる知見は次のとおりである。

第一に、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポートと幼稚園児をもつ父親・母親の育児感情と家族関係に関する意識には関連があることが明らかとなった。具体的には、育児ソーシャル・サポートと育児感情の関連から、育児ソーシャル・サポート意識が高い親は、育児不安や否定的育児感情が低く、肯定的な感情が高くなる傾向があることから、親の育児感情を健全な状態に保つ効果が期待できる。また、育児ソーシャル・サポートは親の積極的な子どもとかかわりにも関連があり、子育ての質や親子関係に影響があることが明らかとなった。親子関係が量的にも質的にも向上することで、子どもとの絆や親の養育力を高めることに繋がるものと考えられる。さらに、家族関係の基盤である夫

婦関係についても関連性が認められ、子どもの生活基盤となる家庭生活の安定性に影響があることがわかった。父親・母親の子育ての拠り所として、親子関係や夫婦関係を支えることが保育施設に求められる役割である。

第二に、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポートに内在する5つの下位因子項目と幼稚園児をもつ父親・母親の育児感情と親子関係、夫婦関係に関する意識との関連性の諸相から、父親・母親に必要な支援内容を把握することができた。具体的には、次の5点があげられる。①保育の専門家による育児ヘルプは、親子関係や夫婦関係の安定に繋がること、②配偶者による精神的サポートは、親の育児感情、親子関係及び夫婦関係の全ての項目と関連があり、特に夫婦関係の基盤となる意識に与える影響が高いこと、③居場所は、育児感情、親子関係及び夫婦関係の全ての項目と関連があり、特に育児感情と親子関係に影響があること、④短時間の託児に関しては、相関が認められなかったこと、⑤身近な人からの育児ヘルプは、親子関係と夫婦関係に関連があることが明らかとなったことである。このように、親の支援ニーズに応じた育児ソーシャル・サポートが安定的に提供されることが重要であるが、核家族、WLB等の家庭に内在する問題から、得られる支援が十分でないことも推察される。保育施設の役割を明らかにするためには、家族形態や就労状況等を観点とした子育て支援の在り方について検討することが必要と考える。

第三に、育児ソーシャル・サポートの具体的支援内容を示す下位因子と各尺度の相関から、父親・母親が求める支援ニーズについて把握することができた。父親・母親の支援ニーズは共通する点もあり、子育て中の親として社会的支援の必要性が顕在化した。また、父親が求める支援としては、居場所が父親の親子関係と関連性が認められた点が特徴となった。日ごろ子育てに不慣れな父親にとって、身近な保育施設に集い同年代の親子や子育て情報を共有する機会や他の子どもとかかわる機会があることは、父親の積極的な子育てへのかかわり意識を高めることが明らかになった。保育施設の役割として、父親と子どもが触れ合う場や父親同士の交流の機会の提供等、今後の子育て支援を検討する上で有用な視点となる。

## 第5章：研究成果と総合考察

### 第1節：研究成果

本研究は、子どもの健全な育ちを保障する育児ソーシャル・サポートの実現をめざして、社会と子育て家庭の関係を繋ぐ新たな子育て支援の可能性について検証した。具体的には、育児ソーシャル・サポート尺度開発を通して保育施設を拠点にした孤育て解消の可能性について検討をおこなった。本研究における一連の研究成果として得られた知見は次のとおりである。

第一に、子育て家庭の現状と課題について関連する研究動向を整理した結果、乳幼児期の子どもをもつ家庭の子育ての実情から、子育ての困難性、父親の育児参加の困難性、母親への育児負担の偏り等の課題を顕在化し、育児ソーシャル・サポートの重要性について言及した。特に、育児ソーシャル・サポートを安定的に提供できる地域の子育て支援拠点として、保育施設がもつ子育て自助・共助・互助・公助を基盤とした重層構造による子育て支援の有用性が示唆された。しかし、保育施設に着目した育児ソーシャル・サポートの可能性について十分に検討されていないことが課題として顕在化された。

第二に、父親・母親が求める育児ソーシャル・サポートについて検討した結果、父親・母親共に配偶者からの精神的サポート及び子どもと親同士が交流できる居場所があることが、否定的育児感情を緩和させることが示唆された。

第三に、配偶者からの精神的サポートを共有する学びの「場」、子育て家庭が集う居場所として保育施設の有用性について検討をおこなうために、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度を開発し、その因子構造と信頼性について検討した。「保育の専門家による育児ヘルプ」因子、「精神的サポート」因子、「居場所」因子、「短時間の託児」因子、「身近な人による育児ヘルプ」因子の5因子、計22項目からなる「保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度」が開発され、一定の信頼性が備わっていることが確認された。

第四に、本研究で開発した保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度を用いて、子どもの育ちに影響を与える要因を検討した。研究の結果、①育児感情、②親子関係及び③夫婦関係が要因として把握された。特に、精神的

サポートは、父親・母親共に全ての項目と相関関係が認められたことから、育児ソーシャル・サポートにおいて最も重要視すべき支援項目と捉えることができる。父親・母親共に夫婦関係における関連性が高く、配偶者からの精神的サポートは、配偶者との関係性における満足度を向上させることがわかった。子育て支援においても保育施設の適切な活用は、父親・母親の育児感情を健全化し、親子や夫婦関係といった家族関係を良好に保つことが確認された。

## 第2節：総合考察

研究成果を踏まえて、保育施設を拠点にした孤育て解消の可能性について考察する。

第一に、保育施設を拠点にした子育て支援において、子育て家庭の育児ソーシャル・サポートの現状を把握することが、子どもが健全に育つために不可欠な家庭への支援の第一歩となる。本研究により開発された育児ソーシャル・サポート尺度を用いることで、父親・母親の育児ソーシャル・サポート意識を測定可能であることが確認された。父親・母親の育児ソーシャル・サポート意識と子どもの育ちを規定する因子との関連性から、子どもの育ちに有用となる育児ソーシャル・サポート内容を具体的に把握できることが示唆された。

第二に、育児ソーシャル・サポート尺度を用いた実証的研究を通して、育児ソーシャル・サポートが得られていることで親の育児感情を健全化し、親子や夫婦関係といった家族関係を良好に保ち、子どもの健全な育ちに有用であることが示唆された。本研究では、父親・母親共に、配偶者からの精神的なサポートを求めていることが明らかになった。特に、父親の子どもへの積極的なかかわりと配偶者（妻）からの「精神的サポート」に有意な関連が認められた。父親は、配偶者と子育てについて相談すること、自分の子育てについて理解や協力が得られることで、子育てへの積極的な参加や肯定的な子どもへのかかわろうとする意識が高まる。しかし、夫婦間では十分なコミュニケーションが得られておらず、否定的な育児感情や孤育てが解消されていない実態が明らかとなった。保育施設は、父親・母親の子育て意識の醸成をめざし、夫婦間の満足度やパートナーシップ等の夫婦関係を安定させることを視点とした支援が求められる。具体的には、夫婦で参加できる子育てに関する学習会や夫婦で共有できる子育て



情報の提供等、子育てに関する学びの機会を継続的に提供することで、子育てに関する相互理解のきっかけづくりの必要性が示唆された。

第三に、父親・母親が求める育児ソーシャル・サポートには特性があることが明らかとなった。具体的には、保育の専門家による育児ヘルプは、母親にとっては肯定的な育児感情と関連があり、保育者とのかかわりによって自分の子育てを見つめなおす機会にもなる。しかし父親は、人間関係が十分に形成されていない保育の専門家からの育児ヘルプには否定的な感情を有していることが示唆された。子育てにかかわりたくても就労状況等の影響から、子育てへの参加が難しい父親の生活実態に鑑みると、保育施設の利用頻度や保育者との関係性構築が課題となる。保育施設に求められる育児ソーシャル・サポートは、男性に限らず、支援者側の一方的な押し付けは効果が低いことを認識し、利用する親の思いやニーズに寄り添うことを第一におこなうことが必要である。保育者は親との信頼関係づくりをめざし、性別に関係なく参加しやすい雰囲気づくりや仕事をもつ父親・母親も継続的に参加できる活動内容を検討することが重要と考える。

第四に、子育てに悩みを抱える親が、保育施設で生活する子どもの姿や保育者の働きかけに触れることで、子どもの成長過程や子どもへの適切なかかわり方を知る機会にもなる。先行研究では、父親・母親が子育てにおいて望ましいと考えるかかわり方のモデルと出会うことで、子どもにふさわしいかかわり方への理解が深まり、父親・母親が具体的に望ましいかかわりをイメージすることで「積極的なかかわり」を実践することができることが示唆されている<sup>41)</sup>。保育者がふさわしいかかわり方を父親・母親に明示することができれば、子育ての質が向上する可能性を有しているのである。保育者は、親の支援ニーズに寄り添いながらも、子育て家庭が子どもの健やかな育ちにとってよりよい環境となるように、必要に応じた指導・助言ができる関係づくりが支援の鍵となる。

最後に、育児ソーシャル・サポート尺度を用いた実証的研究を通して、育児ソーシャル・サポートが得られていることで親の育児感情を健全化し、親子や夫婦関係といった家族関係を良好に保ち、子どもの健全な育ちに有用であることが示唆された。特に、父親・母親共に配偶者の精神的サポートが、子どもの育

ちの規定要因となる育児感情、親子関係及び夫婦関係の全てに与える影響が大きいことも確認された。子どもの健全な育ちを保障するためには、父親・母親の心の安定や相互の信頼関係が重要となる。保育施設が子育て家庭にとって身近な子育て相談の場となることで、子育て自助・共助・互助・公助を基盤とした重層構造による子育て支援の実現につながるものと考えられる。

### 第3節：今後の課題

核家族家庭が主流となる現代の家族において、配偶者による精神的サポート、居場所、短時間の託児、身近な人からの育児ヘルプ等、専門的な保育施設・配偶者以外の支援を十分に得ることは容易ではない家庭があることも事実である。今後は、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート尺度を用いた実証研究の対象を保育園、認定こども園、子育て支援センターと広げるとともに、実際に子育て支援プログラムに参加している父親・母親へのヒアリング調査を通して、保育施設に求められる支援内容の特性について把握することが必要となる。また、本研究で開発された分析尺度の精度を高め、分析項目を精選することで回答者の負担を軽減することも必要と考える。

核家族家庭が主流となった現代社会において、子育ての自助・共助・互助・公助が実現できる支援システムの確立が求められている。一人親家庭や多様化する家族形態にも着目し、子どもの育ちに影響を与える関連要因について精査を進め、子どもの育ちを保障する子育て支援の実現に向けた取り組みをおこなうことが必要である。

保育施設は、地域の子育て支援に関連する諸機関や地域サービス、地域における人的資源等と子育て家庭を繋ぐネットワーク拠点としての役割が期待される。今後は、保育施設を拠点にした育児ソーシャル・サポート・ネットワークに関するシステムモデルの構築をめざして研究を進めたい。保育施設が子育て支援の拠点になることで、互いに子育てを支え助け合える社会の実現へと歩を進めることができるものと考えられる。

## 注

注 1) 内閣府 (2007) 「仕事と生活の調和 (ワーク・ライフ・バランス) 憲章」等において「男女がともに、人生の各段階において、仕事、家庭生活、地域生活、個人の自己啓発等、さまざまな活動について、自らの希望に沿った形で、バランスをとりながら展開できる状態のこと」と定義されている。

注 2) Web 調査の妥当性については、大隅昇・前田忠彦 (2008) インターネット調査の抱える課題—実験調査から見えてきたこと—(その 2). 日本世論調査協会報. 101. 79-94, 長崎貴裕 (2008) インターネット調査の歴史とその活用. 情報の科学と技術. 58 (6) . 295- 300. を参考にした。本研究においては、総調査誤差 (カバレッジ誤差, 測定誤差, 標本誤差, 無回答誤差), データ加工処理誤差, 加重補正誤差等の体系的な評価が調査品質を左右するが, Web 調査等の改善もこうした枠組みの中で考察すべきであり, これの延長線上に混合方式 (mixed-mode) や統合化方式 (unified mode) の議論がある。完璧な調査方式等はなく, よって種々の調査方式の特長を組合せた混合方式で対応することから出発し, Web 調査がこの枠組みの中で重要な位置を占め, 様々な要請に応えられる可能性のある調査方式の 1 つであるという立場に立ち, 調査等を実施した。

---

## 引用文献

(1) 佐藤和順・熊野道子・柏まり・田中亨胤 (2014) 保育者のワーク・ライフ・バランスが保育の評価に与える影響. 保育学研究. 日本保育学会編. 52 (2) . 243-254

(2) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2016) 子ども・子育て支援新制度なるほど BOOK (平成 28 年度改訂版) .

(<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/> : 最終参照日 : 2018. 1. 25)

(3) 内閣府 (2010) 第 3 次男女共同参画基本計画策定に向けて (中間整理) . 6.

([http://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2010/201006/201006\\_11.html](http://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2010/201006/201006_11.html) : 最終参照日 : 2017. 12. 10)

(4) 前掲 (1)

(5) 前掲 (1)

(6) 総務省 (2016) 平成 28 年社会生活基本調査—生活時間に関する結果—. 2 「家事関連時間」

(<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou2.pdf> : 最終参照日 : 2018. 1. 23)

---

(7)内閣府「少子化対策」「夫の協力：6歳未満の子供をもつ夫の家事・育児関連時間（1日当たり・国際比較）」

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/ottonokyouryoku.html>：最終参照日：2018.1.23)

(8)前掲(6)

(9)前掲(7)

(10)NPO法人ファザーリング・ジャパン「父親の育児・家事」

(<http://fathering.jp/activities/fatherhood>：最終参照日：2018.1.23)

(11)柏木恵子(2011)子どもが育つ条件—家族心理学から考える. i~iv

(12)柏女霊峰(2017)これからの子ども・子育て支援を考える—共生社会の創出をめざして—. ミネルヴァ書房. 113-115

(13)同上書(12)

(14)柏女霊峰(2003)子育て支援と保育者の役割. フレーベル館. 28-29

(15)大豆生田啓友・大田光洋・森上史朗編(2014)やわらかアカデミズム・<わかる>シリーズ よくわかる子育て支援・家庭支援論. ミネルヴァ書房. 4-5

(16)同上(15)

(17)前掲(15). 48-49

(18)前掲(15). 51

(19)House, J.S. (1981) Work stress and Social Support. Massachusetts: Addison-Wesley. Publishing Company. 13-26

(20)久田満(1987)ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題. 看護研究. 20(2). 170-179

(21)柏木恵子・若松素子(1994)『親となる』ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究. 5(1). 日本発達心理学会. 72-83

(22)津田千鶴・菊池武剋(2000)育児期の有職女性の生活満足度に関する要因の検討. 日本発達心理学会第11回大会発表論文集. 日本発達心理学会. 228

(23)荒木美幸・大石和代・岩木宏子・渡辺鈴子・池田早苗・達田志津子・小川由美(2001)育児期にある母親に対するソーシャルサポートと育児ストレスとの関連性. 長崎大学医療技術短期大学部紀要. 14(1). 89-95

(24)渡辺弥生, 石井睦子(2010)乳幼児をもつ母親の育児ストレスにソーシャル・サポートおよび自己効力感が及ぼす影響について. 法政大学文学部紀要. 60. 133-14

(25)牧野カツ子(1982)乳幼児期の子どもをもつ母親の生活と<育児不安>. 家庭教育研究所紀要. 3. 34-56

(26)手島聖子・原口雅治(2003)乳幼児健康診査を通じた育児支援—育児ストレス尺度の開発—. 福岡県立大学看護学部紀要. 1. 15-27

(27)同上(26)

(28)原口雅治・手島聖(2006)育児ソーシャル・サポートの構築. 久留米大学文学部心理学科 大学院心理学研究紀要. 5. 21-28

(29)寺見陽子・別府悦子・西垣吉之・山田陽子・水野友有・金田環・南憲治(2008). 中部学院大学・中部学院短期大学部研究紀要. 9. 59-71

(30)前掲(26)

(31)荒巻美佐子(2008)育児感情尺度. 堀洋道(監修). 松井豊・宮本聡介(編).

- 
- 心理測定尺度集VI 現実社会とかかわる〈集団・組織・適応〉.サイエンス社. 219-224
- (32)前掲(26)
- (33)前傾(28)
- (34)前掲(26)
- (35)前掲(26)
- (36)前掲(26)
- (37)柏まり・岩佐和典・佐藤和順(2016) 保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度の開発. 岡山県立大学保健福祉学部紀要. 23(1). 33-39
- (38)前掲(31)
- (39)佐藤和順・熊野道子・柏まり・田中亨胤(2014) 保育者のワーク・ライフ・バランスが保育の評価に与える影響. 保育学研究. 52(2). 242-245
- (40)諸井克英(2011) 夫婦関係満足度尺度. 堀洋道(監修). 吉田富士雄(編). 心理測定尺度II 人間と社会のつながりをトラエル〈対人関係・価値観〉. サイエンス社. 149-152

#### 参考文献

- 1) 荒木美幸・大石和代・岩木宏子・渡辺鈴子・池田早苗・達田志津子・小川由美(2001) 育児期にある母親に対するソーシャルサポートと育児ストレスとの関連性. 長崎大学医療技術短期大学部紀要. 14(1). 89-95
- 2) 荒巻美佐子(2008) 育児感情尺度. 堀洋道(監修). 松井豊・宮本聡介(編). 心理測定尺度集VI 現実社会とかかわる〈集団・組織・適応〉. サイエンス社.
- 3) 大日向雅美(2005) 「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない. 岩波書店.
- 4) 大隅昇・前田忠彦(2008) インターネット調査の抱える課題—実験調査から見えてきたこと—(その2). 日本世論調査協会報. 101. 79-94.
- 5) 大豆生田啓友・大田光洋・森上史朗編(2014) やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ よくわかる子育て支援・家庭支援論. ミネルヴァ書房. 4-5
- 6) 柏木恵子(2011) 父親になる, 父親をする—家族心理学の視点から—. 岩波書店.
- 7) 柏まり・岩佐和典・佐藤和順(2016) 保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポート尺度の開発. 岡山県立大学保健福祉学部紀要. 23(1). 33-39
- 8) 柏女霊峰(2003) 子育て支援と保育者の役割. フレーベル館.
- 9) 柏女霊峰(2009) 子ども家庭福祉論〔第4版〕. 誠信書房.

- 
- 10) 柏女霊峰 (2011) 子ども家庭福祉・保育の幕開け—緊急提言 平成期の改革はどうあるべきか. 誠信書房.
- 11) 柏女霊峰 (2015) 子ども・子育て支援制度を読み解く—その全体像と今後の課題. 誠信書房.
- 12) 小杉正太郎・島津美由紀・大塚泰正 (監訳) (2005) ソーシャルサポートの測定と介入. 川島書店.
- 13) 佐藤和順・熊野道子・柏まり・田中亨胤 (2014) 保育者のワーク・ライフ・バランスが保育の評価に与える影響. 保育学研究. 52(2). 242-245
- 14) 総務省 (2016) 平成 28 年社会生活基本調査—生活時間に関する結果—. 2 「家事関連時間」<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou2.pdf>: 最終参照日 : 2018. 1. 23)
- 15) 手島聖子・原口雅治 (2003) 乳幼児健康診査を通じた育児支援—育児ストレス尺度の開発—. 福岡県立大学看護学部紀要. 1. 15-27
- 16) 寺見陽子・別府悦子・西垣吉之・山田陽子・水野友有・金田環・南憲治 (2008) 中部学院大学・中部学院短期大学部研究紀要. 9. 59-71
- 17) 天童睦子・高橋均・加藤美帆 (2016) 育児言説の社会学—家族・ジェンダー・再生産. 世界思想社.
- 18) 内閣府 (2010) 第 3 次男女共同参画基本計画策定に向けて (中間整理) . 6.
- 19) 内閣府「少子化対策」「夫の協力：6歳未満の子供をもつ夫の家事・育児関連時間(1日当たり・国際比較)」  
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/ottonokyouryoku.html> : 最終参照日 : 2018. 1. 23)
- 20) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2016) 子ども・子育て支援新制度なるほど BOOK (平成 28 年度改訂版) . (<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/> : 最終参照日 : 2018. 1. 25)
- 21) 中谷彪 (2006) 子育て文化のフロンティア—伝えておきたい子育ての知恵—. 晃洋書房.
- 22) 中村佳子・浦光博 (2000) ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について

- 
- 対人関係の継続性の視点から—. 社会心理学研究. 15(3). 151-163
- 23) 長崎貴裕 (2008) インターネット調査の歴史とその活用. 情報の科学と技術. 58 (6) .295- 300.
- 24) N P O 法人ファザリング・ジャパン 「父親の育児・家事」  
(<http://fathering.jp/activities/fatherhood> : 最終参照日 : 2018. 1. 23)
- 25) 原口雅治・手島聖 (2006) 育児ソーシャル・サポートの構築. 久留米大学文学部心理学科 大学院心理学研究紀要. 5. 21-28
- 26) 原田正文 (2002) 子育て支援と NPO. 朱鷺書房.
- 27) 久田満 (1987) ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題. 看護研究. 20(2). 170-179
- 28) 広田照幸 (1999) 日本人のしつけは衰退したか「教育する家族」のゆくえ. 講談社.
- 29) 本田由紀 (2008) 「家庭教育」の隘路子育てに強迫される母親たち. 勁草書房.
- 30) House, J.S. (1981) Work stress and Social Support. Massachusetts: Addison-Wesley. Publishing Company. 13-26
- 31) 牧野カツ子 (1982) 乳幼児期の子どもをもつ母親の生活と<育児不安>. 家庭教育研究所紀要. 3. 34-56
- 32) 松木洋人 (2013) 子育て支援の社会学—社会化のジレンマと家族の変容. 新泉社.
- 33) 諸井克英 (2011) 夫婦関係満足度尺度. 堀洋道(監修). 吉田富士雄(編). 心理測定尺度Ⅱ 人間と社会のつながりをトラエル<対人関係・価値観>. サイエンス社.
- 34) 山川玲子・柏木恵子 (2004) 母親の子ども・育児感情—虐待の温床としての育児不安の要因—. 文京学院大学研究紀要 6(1). 185-200
- 35) 渡辺弥生, 石井睦子 (2010) 乳幼児をもつ母親の育児ストレスにソーシャル・サポートおよび自己効力感が及ぼす影響について. 法政大学文学部紀要. 60. 133-14

---

## 謝辞

本論文は、筆者が岡山県立大学大学院保健福祉学研究科保健福祉科学専攻博士後期課程に在籍中の研究成果をまとめたものです。同大学保健福祉学部 佐藤和順教授には、主指導教員として本研究の実施の機会を与えていただき、その遂行にあたっては、終始、熱心に忍耐強くご指導をいただきました。研究者・指導者として、人としての生き方の模範であり、心から尊敬しています。ここに深謝の意を表します。同大学保健福祉学部 中村光教授には副指導教員として有益なご助言をいただくとともに、本論文の細部にわたり丁寧なご指導をいただきました。ここに深謝の意を表します。同大学保健福祉学部 村社卓教授、高橋徹教授、川上貴代教授には、副査として温かくご指導をいただくとともに、研究のさらなる展望について多くの示唆をいただきました。ここに深謝の意を表します。本研究の第3章「育児ソーシャル・サポート尺度の開発」では、就実大学准教授 岩佐和典先生に有益なご助言をいただきました。ここに深謝の意を表します。岐阜聖徳学園大学短期大学部教授 田中亨胤先生には、研究者としての心構えをはじめ、博士論文執筆に際しての心得について丁寧なご指導をいただきました。ここに感謝の意を表します。神戸女子大学教授 三宅茂夫先生、同大学教授 大西雅裕先生、神戸常盤大学教授 多田琴子先生、豊岡短期大学准教授 栗岡あけみ先生、大阪青山大学教授 小林みどり先生には、温かく励まし、多くの示唆をいただきました。ここに感謝の意を表します。

本論文の執筆に際し、お世話になったすべての方に、感謝の意を表します。

最後に、博士課程への進学を快く認め、家事の90%以上を担ってサポートしてくれた夫の健一さん、忙しくなる度にさみしい思いをさせたけれど優しくたくましく成長し、いつも家族を笑顔にしてくれた息子の颯馬くん、心より感謝します。家族の存在と支えがあったからこそ、乗り越えることができました。本当にありがとう。

本研究の一部は JSPS 科研費 26350058 の助成を受けたものです。